

日本研究

2008年12月26日

国際日本文化研究センターにて

話し手

稲賀繁美先生

鈴木貞美先生

李偉さん

聞き手

黒須正明

黒須：今回伺った趣旨は、総研大にいる留学生のために日本語で論文なりを書くときに正しい日本語で書いてもらうためのコースウェアを作っており、そのコンテンツ作成にご協力いただきたいということです。コースには、入門・初級・中級・上級とあり、最後のレベルの論文編について、研究の進め方とか論文へのまとめ方といったお話を伺いたいと思っております。

論文に関してのことですので、日本人の学生も含めて対象に考えていただければと思います。

稲賀：むしろ日本人の指導の方が大変だというのが、副学長の湯川先生がいらっしやったときに話題になりました。

黒須：よろしくお願いします。

稲賀：国際日本専攻以前に黒須先生が面接された専攻でどういう話が出ているのか、まず最初にこちらからお聞きしておいた方が重複も省けますし、そのほうが少しは建設的なことも言えるかな、という気はするのですが。

黒須：始めは、国際日本文化研究センターの専攻としてどういう研究領域がまず含まれているかということから。

稲賀：まず、これが大変なのです。

黒須：それを何学と呼んだらよろしいかといいますか。

稲賀：国際日本研究は、とにかく特定のディシプリンがない。つまり学生の数だけやっていることが違うわけで、考古学の学生、理系の地球環境問題を専攻する学生から文科系までいるわけです。文科系も社会学みたいなことをやっている院生もいれば文献調査をする院生もいる。いつでも論文指導以前で困っているのは、共通のディシプリンがないものですから、論文の作法も学生の数だけ違ってきてしまいます。当専攻は副主任指導教官を入れて3人指導体制です。そのため先生の専門が違っていると論文作法も違ってきてしまう。だから学術誌のフォーマットに添って、そのたびに全部やり方からアプローチから変えなければ、学生は学術誌のリクワイアメントに応じる論文を書けない。つまりそもそも論文掲載ができないわけです。何かの型に嵌めなければならないわけですが、その型がディシプリンとして、基盤機関である国際日本文化研究センターには存在しないことになるわけです。大学院での教育のレベル以前の話に戻ってしまいますが、基盤機関では『日本研究』という学術誌を出しています。けれども、この雑誌の場合も、試行錯誤はしたものの、結局、これで万能といった書式の方針は立てようがないに等しいのです。

黒須：でも日本研究ではあるわけですね。

稲賀：私の個人的な意見になってしまいますけども、「日本研究」と呼ばれる括りがあるということは、逆に言うと英語であれ日本語であれ、それ以外の中国語・韓国語の媒体でも構いませんが、既存の学会誌に取り込めるような論文は、そちらで出せばいい、ということになる。むしろ日文研の学術雑誌の場合には、そうした既存のディシプリンには適合しないけれども学術的に意味がある、あるいは、既存の学会雑誌では出版しにくいけれども先駆性のある原稿をできるだけ拾っていきたい。理想論を言えばそうなります。けれどもそうなると、ピアレビューをやるにしても、審査員各位が自分の学会の作法を持ちこんでこられたら、もうてんやわんやになってしまって何も決定できない。学生は場合によっては、まずそのレベルでかなり困るわけです。ただ、指導主任の先生がこの学会誌にお出しなさいとおっしゃれば、もちろんその書式に合わせていくという必要があります。それから総研大でもレフェリージャーナルの刊行を始めたわけですが、今年はどうしたわけか、投稿はことごとく全滅してしまった。その理由はまだよくわかりませんが。

黒須：そうですね。歴博さんだけになっちゃいましたけど。

稲賀：この場合も、結局我々の「文化科学研究科」として同じ問題を抱えていることになりますね。つまり特定のディシプリンを跨ぐさまざまな論文をいったいどうやって審査するかという問題は、我々の研究科にもついて回ることになるはずですよ。一般論で申しますとそうした次第ですので、最初のご質問には、なかなかうまく答えられないのですが、逆

に言うとは海外でそれこそ、北米でしたら AAS ですか、アソシエーション・フォー・エイジアン・スタディーズとか、ヨーロッパの場合にもヨーロッパ日本学会議というのがございます。これらの場合にも学問上のディシプリンは多岐にわたっている。両方一緒に論じるのは、やや乱暴ですが、AAS の場合は原則としてワークショップを組むかたちで応募をして、その提案が受け入れられれば発表ができる。そうでなくて個人で申し込んだ場合にはどこかの適当な枠の中に入れてもらって、という形式です。この方式では、比較的、ディシプリンの差異は、障壁とはならない。政治学・経済学からそれこそ文学、人類学まで広がりがありますから。

黒須：そうすると一応文系の枠ではあるわけですか。理系は？

稲賀：やっぱり理系でアジア特有の、という括りには、多くの自然科学の学会では、なりませんものね。

黒須：経済とか政治は入ってきますか。

稲賀：もちろん、政治分析や、経済史などは、アジア研究学会にも入っています。ひとくちに経済といっても、経済学一般と地域経済史は全然違う学問分野であるようです。それからヨーロッパの日本学研究会の場合には、分科会が 10 ぐらいは並んでしまいますから、つまり各々のディシプリンごとの区分、ということになります。したがって応募する側はどのディシプリン、どの分野ということを見定めれば、当該分野の専門の先生が審査員に入っていらっしゃるから、そんなにひどいことにはならない。そこから先は学会水準の話ですから、場合によっては理不尽なことが起こるのかもしれませんがありませんけれど、だいたいそういう枠に従って海外向けには、できれば院生のレベルでも積極的に発信していきたい。ないし国際的な「日本研究」の場合には、とにかくそうしたマーケットは存在するという事です。

ところが中国・韓国になるとまた話が違ってきて、とりわけ中国の場合にはアカデミックな伝統が、日本とはかなり違う。中国でこうなさいと言われた指導に従って学生たちが書いた模範的な論文は、日本の学界作法では、残念ながら、ほぼ通用しない。ところが逆に日本式に一次資料をきちんとそろえて、微にいり細を穿ったような論文は、中国に持っていっても「こういうものは役に立ちません」という具合に門前払いを食らってしまう。

これも難しいところですけど、中国の場合、学問的伝統として、一つの主題に関するきちんとした研究や単行本の研究書は、古代から始めて現代まで来なくちゃいけないとか、わりと百科事典的なところがあります。どうやら学術成果というものは、人民のために奉仕するものでなければならない、という一種の暗黙の了解があるように思われます。そのためか、欧米などで基本的な了解となっている個人業績の扱い、つまり個人業績をどうや

ってマーケットに提供していくかといった基本的認識に、国によっていまだにかなり落差があるように思います。端的には、まず中国の留学生に引用の使い方を教育するのは大変難しい。日本でも高校までではそうした教育は全くなされていないに等しいわけですが、中国の場合、刊行物になる印刷物は、いわば人民全体で共有するものであり、それに奉仕するのが学問だということになれば、いったん刊行された公認の文書について、いまさら誰がいつどのような媒体に書いたのか、とか、やれ著作権とか、引用出典の確認とか、先行研究の確認とかといった史料批判の手続きは、当然ながら二の次になるのでしょう。みんなが共有する文献から引いてきた、ということになれば、それはもう出発点からして人民の共有物であるわけで、それについてオーサーシップやコピーライトを問うといったこと自体が、国是としてかえって無意味な、いわばブルジョワ的偏向と見なされかねない。これはいささか私の勘繰りかもしれませんが、少なくとも高校・大学レベルまでそういう教育を受けてきた人たちに、いきなり論文での引用の仕方はこうです、といった欧米や日本の学界流儀を頭ごなしに叩き込もうとしても、なかなか理解してもらえないわけです。

黒須：国文研さんと歴博さんに伺ったんですが、歴博さんでは日本歴史学というよりは文献史学と呼んでおられましたし、国文研さんでもやはり文献の原典をベースにした原典主義というお話をお聞きしたんです。その考え方はある原典に関して突っ込んでいくというのですが、それは中国の見方からすると狭いということになるのでしょうか。必ずしも古代から現代までという流れじゃなくてやるわけですから。

稲賀：難しいところですけど、原典に対する扱いは、はっきり申しまして日中（ただし大陸）で、異なった伝統ができてしまっていると思います。それがいったいいつからのことか、というのはまた学問史上、大変面白い問題かと思えますけれど、少なくとも日本研究に関して言うと、日本臭さのある日本研究を中国人がわざわざやっても意味がない。中国でなされるべき日本研究は、あくまでも中国で役に立つものでなければならぬ、という了解は、北京大学など大陸の権威ある学府では、鉄則となっているように見受けられます。

黒須：要するに中国で評価されないと。

稲賀：そうですね。さらにもう一步踏み込めば、中国の場合、専門家の研究者の次に広がる枠というと、これは師範学校の先生方ということになりますが、ここではやはり教材としていかに日本なら日本という素材を使っていくかという実用的な価値判断が入ってきます。今の日本で行われているその文献学的なディシプリンというのは、そうした目的とはもともとから接合することを考えていないディシプリンです。そのため、やはり中国での外国研究という場合の目的設定とはどうしてもずれてきてしまう。中国人の留学生の場合には、

こうした中日の差異をわきまえたうえで、自分の立場設定をどうするかに、かなり意識的になる必要があるだろうと思います。はっきり申せば、将来日本に残るのか、それとも中国に帰るのか。それによって、学び取るべき論文作法そのものが違ってしまいうわけです。

黒須：そうですね。だから母国、中国の方を向いているか、日本でやるか、という向き方によってアプローチが違ってくる。

稲賀：というのが、北京で教えていての、私なりの実感ですね。

黒須：その場合、日文研さんに来て中国を向いて研究するというのは日文研さんとしては不本意なことではないのでしょうか。

稲賀：これも私の個人的な考えになってしまいますけども、日文研すなわち「国際日本文化研究センター」という設定をしたかぎりにおいては、永遠に解決がつかない宙ぶらりんをいわば自分たちに課しているのではないかという気がします。ただ、これは学術出版物のレベルになるとかなり難しい問題をはらんでいます。つまり中国のずいぶん偉い先生方が投稿してくださった論考を、いったい『日本研究』に文句なく掲載できるかという、これはいつでも評価が割れかねない。現実問題として、大陸中国の本国では大変高い評価をもらえるような模範的論文が、日本ではこれでは学術論文とは言えませんという評価になってしまったりするわけです。だからといってこうしなさいという基準を立てられるほど我々独自の見方があるわけでもない。なぜかといえば、我々自身が、日本国内で見れば、それこそ矛盾したディシプリンの寄り合い所帯でしかないから、という「日本研究」ならではの初期条件を背負っているからです。

黒須：ディシプリンが違うということはわかったんですが、具体的にもう少し平たくおっしゃっていただくと・・・、どうも、こんにちは。

(鈴木先生が通りかかる)

稲賀：こんにちは。

鈴木：ごぶさたしております。

黒須：先生、突然で申し訳ありませんが、よろしければぜひご参加ください。お時間があれば。

稲賀：また鈴木さんと私とで、見解が違ったりして矛盾をきたしかねませんが。

黒須：さて、そのディシプリンの違いというのが、例えば文学に関して中国と日本でどう違うかという、日本はいわゆる文献学的なアプローチを取っている。

稲賀：その「いわゆる」がまた、くせもので、それを言いだすと大脱線しちゃいますけれど、つまり日本で20世紀以降に発達した国文学の、しかも古典における文献学というのは、たしかに出発点ではシュラエルマッハーやディルタイなどを齧ってはいるけれど、あれはいったい何なんだろう、と問うならば、これは学術史のうえで、かなり面白いものだろうと思います。つまりヨーロッパの伝統とも、もう離れてしまっているわけですよ。

黒須：そうなんですか。例えばイギリスにおける英文学というのはやっぱり文献学的なアプローチなんでしょうか。

稲賀：これは大問題ですよ。まず文献学という言う以前に、イギリスにおいて大学で英文学研究というものが始まったのは大変遅いわけで、つまり自国の、しかも現代文学なんて、19世紀のあいだは、ほとんど学問分野としては成立していなかったわけです。ロンドン留学中の漱石がシェイクスピアを学ぶためにクレイグ先生に私的に教わったことひとつからも分かりますが、英国の大学での国民文学研究は、20世紀になってようやくディシプリンとして確立されてくるといってよい。これはそれこそ鈴木さんの現在進行中のご専門に重なる話題ですが。

黒須：英文学というものはイギリスにも19世紀以前はなかったということですか。

稲賀：ギリシアやラテンの古典文学研究はありますけども、いわゆるシェイクスピア研究だとか、英文学史などというものが英国の大学アカデミズムの中に入ってきたのは、日本の官立大学での国文学研究の成立よりも遅れるのではないかと思います。またそこから先は比較がきわめて難しく、日本における国文学とイギリスにおける英文学とを比べるとやり方も、理論的にはありえますけれども、英文学の内部でも、それこそ英国における英文学研究と、日本における英文学研究との違いを見なくちゃいけない、という話になる。ところが、両者はまったくの別世界といつてよい。日本の場合、大学での一般教養の英語担当教師まで含めて考えると、受け皿の大きさが全く違ってきてしまいます。いうまでもなく、日本の英語の専門家の数は、イギリスの日本文学のそれより桁違いに、はるかに大きくなる。そうすると、いったいどのような専門家をどの程度の人数、養成するかという目標設定も、英国での日本文学研究の場合と日本における英米文学研究の場合とでは、全く比較が成立しなくなってしまう。さらに日本の場合のいわゆる英学、それから今日の英

米文学研究というものは、これはまた言いだすとオフレコのことをたくさん出てきかねないので、『英語青年』を始めとして、はっきり言って、外国のどこにも通用しない慣習を、もっぱら国内市場向き専用に一生懸命再生産してきたわけです。そこから先は本当に不思議なほど世界から孤立した「ガラパゴスの世界」、外からの評価から隔絶した絶海の孤島だといって誇張はないと思うのですが。

黒須：すると国際日本文化研究センターでは、海外で評価されること、あるいは海外で理解してもらうことを目標にしているのでしょうか。どうかたちの評価基準を設定して？

稲賀：これも大変いいご質問だと思いますけど、それがきちんと設定できないところに我々の面白さがあるのだらうと思います。つまり下手に評価基準を設定してしまうと、それが権威になってしまうけれども、いったい、この国際日本文化研究センターという組織は、そのような国際的クライテリアを示すことがミッションなのか。といたら、多分そうではない。むしろ学術情報流通のハブ的な機能を持つということは目標としてもよいのですが、こうしなければナラヌみたいなゾレンを主張する、というのは我々の立場ではないはずですよ。

黒須：先生方が研究者としてご自分の研究をしていらっしゃる場合にはそれでもいいだろうと思うんです。つまりご自分の評価基準に従って、例えば私は中国で評価されるような研究をしたい、私は日本で評価される研究をしたい。ただ学生さんの研究ということになると、その日文研の中で評価しなきゃいけなくなるわけで、そのときにディシプリンが定まらないということになると学生の研究をどう方向付けたらいいかというのが問題になるようにも思うのですが。

稲賀：学生さんの場合はさきほども言いましたように、逆に日文研として国際的基準を示すなどという大それたことまで言わなくてもいいし、示すべき国際基準に関する共通理解もどこにもありません。むしろきわめて実務的に、3人の指導陣がこれでOKと認めるレベルまで論文を鍛え上げて、それで成果物が出てくれば、博士論文審査はできる。

黒須：鈴木先生に簡単にご説明しますと、今、テラーメイド教育の予算を総研大からいただいで、留学生のための日本語教育サイトを作っているんですが、その最終段階として日本語を使って論文を書いたり研究を進めたりするというサイトを作ろうとしているんです。それで研究の進め方や論文の書き方について、これは専攻によって違うだろうということで、文化科学研究科の範囲で専攻を回ってお話を伺っているわけです。こうやって録音したものを書き起こして最終的には教育用のウェブサイトと冊子に掲載させていただこ

うということで、お時間の許すかぎりお話をいただければありがたいです。

お話の中で、日文研さんにはいろいろな分野があるのでさまざまな取り組みがあるということ。その結果として統一したディシプリンがまだないというお話。同じテーマを研究するにしても日本の学会で評価される研究と海外の学会で評価される研究では基準ややり方が違うということ。そして、軸足をどちらに置くかというのが定まらないという難しさがある。というようなお話を今、伺っていたところです。

鈴木：おっしゃるとおりです。

稲賀：さきほどのマーケットの件に戻ると、これは内部でもやはり一種の対立というか見解の相違はある。日文研では *Japan Review* という英語を中心とする欧文の学術誌も発刊しています。そこでの編集方針としては、いやしくも英語で出版する以上、今の英米のマーケットのディシプリンの基準に合わせなければ、学術出版として認知してもらえず、結局発信にならないのだから、そこまでの努力はしなくちゃならないという意見が、一方にはもちろんあります。ただしそれに対して、それを絶対的な善とみなしたり、そこに目標を定めるのはそもそもおかしくて、むしろ優れた業績なのに、受け皿となる既存のディシプリンが英米の学会には欠けているために受け入れのあてがないような特異な学術的産物をこそ、日文研としては率先して応援すべきだという、別の考えもあるわけです。とはいえ、この二つ目の選択肢は、だからといって唯我独尊で日本我流の国粹主義になるわけでは勿論ない。言い換えれば、これでは駄目だ、という最低限の基準枠というか、マイナスの尺度はあるでしょうけれど、逆に絶対これならば合格だといったプラスの尺度は、出来合いの評価基準としては、こと「国際日本研究」に関するかぎり、なかなか見えにくいというのが実感です。で、もと編集委員会委員長のご見解は？

鈴木：それは実際には教員の側にも要求されていることですね。学生においてはやはりどこに発表するかというのが大きな基準になるわけです。海外からの学生——英語圏の人はあまり来ないですけども——、向こうの人はどうしても向こうを意識して書きますよね。だからその実態に応じて指導することになる。

稲賀：学生レベルで実態を観察してみると、結局のところ欧米圏出身の学生たちは、もう90%が母国語で書いて、母国で単位認定、博士号取得という線で動いています。

黒須：さきほどの顔という話だと、顔はもう母国を向いている方もいる。将来、日本で職を得ることはあまり考えていないという。

鈴木：それもまちまち。今、稲賀さんが言ったのは欧米圏の話で、中国・韓国からの留学生は日本で就職したい人もいますから。

黒須：どちらの学会で受け入れられるかを考えるかによって研究のアプローチも違ってくるっていいんでしょうか。

鈴木：アプローチが違うというより、参照範囲や論文の形式ですよ。これは国内の学会も同じ。

稲賀：書き方が、だから、

黒須：書き方ですか。

稲賀：書き方というのは、すごく選択肢が広いんですよ。

鈴木：例えば中国からの学生が日本の論文になじんで論文を書くと、中国では「日本スタイルだね」と言われますよ。それを中国語で書いて中国で出すときには、向こうのマーケットにあわせるという格好を取らざるを得ない。中身の問題ではなく。うちは追求目標として必ず商業出版で本を出させるようにしています。

黒須：それは日本国内で本を出させると。

鈴木：もちろん、海外で出してもいいんだけど、一応ハードルというか、そのぐらいのものにあげるということです。

黒須：それを論文の提出資格要件とするか、ということですね。

鈴木：努力目標です。そのまま本にならない場合は、一部分とか半分ぐらい、一番おいしいところを出すということも含めてですけど。

黒須：先ほど両先生からのお話で論文の書き方がとにかく違うというお話があったんですけども、論文の書き方が違うということは研究の進め方、やり方も違うということでしょうか。

鈴木：必ずしもそうじゃないです。つまり、論文自体をどういう形式でまとめるか、そのレベルの話をしているのです。もちろん、そもそも発想が違うということも政治的な問題もあるでしょう。しかし、研究の内容自体は変えられるわけじゃない。

黒須：例えばいわゆる感想文の発展形のようなもので、必ずしも原典にあたっていない研究についてはどうでしょう。そういった意味での研究アプローチの違い、姿勢の違いというのは。

鈴木：そんなのは研究といいませんよ。だって日本にきていて原典があたれるところでやっているんですから。

黒須：ということはやはり日文研さんは日本における日本研究。

鈴木：いいえ。中国だろうが、アメリカだろうが、原典にあたらないなんていうことはそもそも話にならないのですよ。僕が一番感じるのは、英語圏の査読は英語圏で出ている先行研究に——その中身の問題は別にして——あたっていないと耐えられないということですよ。ところが日本国内では、そんなのは知らん顔している。英語にこんな論文があるじゃないかという査読はしてくれる人がむしろいない。逆もありますよ、日本にきている学生には、日本の先行研究はあたせませよ。しかし、それは先行研究のあたり方とかそういう問題で、アプローチが違うとかいうことではないと思うんです。

黒須：その場合に文学系の研究も法学も政治学も経済学も考古学もいろいろな分野がおありになると思うんですけども、それぞれの分野におけるアプローチは従来、他の日本学研究者がやっているのと同じようなかたちなのではないでしょうか。

鈴木：うちは国際性・学際性を標榜していますので、インターディシプリナリーな、あるいはインターナショナルなアプローチを求めているわけです。ただ中国からの留学生が日本の庭園について研究するのなら、もうそれだけでいいみたいな（笑）、柔軟に考えています。

黒須：インターナショナルということは比較研究をするという。

鈴木：はい。それと文化交流の面。中国の庭園がどういうふうに日本に影響を与えたかとか、を問題にしていればよいということです。

黒須：基本的に基盤のスタンスとして国際という言葉がついているから、日本文化を研究するにしても必ず国際的な視点をそこに入れなければいけないということが、大枠としてはあるということでしょうか。

鈴木：はい。そうでなければ学際性、例えば近世のレプラについて社会史の観点と病理学

の観点から論じる。そういうのはインターディシプリナリー・アプローチになるわけです。国際性か学際性かどちらかがあればいいということにしているわけです。両方を扱えといっても混乱するばかりですから。

黒須：インターナショナルもしくはインターディシプリナリーということですね。

鈴木：はい。一応ね。

稲賀：だから乱暴に言ってしまうえば、国内から受験する人たちに関しては、特定の既存ディシプリンにきちんと嵌っていてその延長上で、という志向だったら、いったい何のためにわざわざ「国際日本専攻」を受けるのですかという質問は、面接の際にしますよね。ここでなければ執筆できない博士論文、この指導陣の複数指導体制で初めて実現できるような研究計画がポジティブにあれば、その学生を積極的に取るということは、入試選考のさいの基本原則のひとつでしょう。

今度は留学生の場合に関して、これも一般論で言うと、例えば経済の研究などを志す人だったら、経済学のディシプリンというのは自分の国に確固として存在する。それプラス「エリア・スタディーズ」としての「ジャパニーズ・スタディーズ」という、最低限二つのダブル・ディシプリンを獲得しないと、社会科学などの場合には、そもそも日本研究者として世渡りしていくことができない。それが前提条件にあるし、戻る母国にしてもそうした就職環境なわけですから、そのことは含んでおいて入学してくれないと、「国際日本専攻」で博士論文を出したとしても、あとで売り込むべき学者マーケットがありません、という事態になるのは明らかです。

加えて、さきほど申しましたように、例えば中国の留学生の場合だったら将来、日本にとどまってやっていくのか、それとも中国に戻って先生としてやっていくのかで、これは根本的に方向が違います。さらに、かつてあった例ですけども、ここで博士号を取得した中国からの留学生が、その後アメリカ合衆国へ行って活躍しているなどというケースも、時には出現するわけです。となると、これはもう枠組みなどを厳密に作るより、何せ定員はたった 3 名ですから、入学生一人一人の適性とそのとき我々が持っている教授陣との間でうまくいくかどうか判断して、それで責任を持てるかぎりで行っていくしかない。それよりきつい枠組みは、制度として設定してもほとんど実効性がないから、そんな無意味な計画はもとより立案などしていない。

鈴木：そうです。意味がないですよ。

稲賀：だから、まだ修士とか学部ならば考え方はあるでしょうけれど、博士課程になったら、やはりそこには、院生の自己責任と、我々が提供できる教育・指導との擦り合わせの

如何が、そもそも博士課程に入ってくる段階での前提条件になるだろうと思います。

黒須：先ほど複数指導体制、3人で指導されているというお話を伺いました。そうするとこちらには教員の方々もいろいろなディシプリンの領域で研究されていますので、3人いればそれだけでインターディシプリンになる余地はあるというか、本質的にそうならざるを得ないと、そういう形なのでしょうね。

稲賀：だから3人の先生みんなに「うん」と言わせるだけで学生は大変苦勞するということはあります。歴史学ひとつだって、北アメリカ仕込みと日本の歴史学では全くアプローチが違います。資料の扱い方から論文作法から、もう「いろは」からして違っています。そこへもう一つ違う、たとえば医学史なり社会学なり、といったディシプリンが錯綜したりなんかした日には、A先生がいいと言ったことをB先生は駄目だという、C先生は、それでは北米では通用しないよ、と助言する、などなどといった事態になっちゃいますから。

黒須：そうか、先生方の言うことの間でずれがあったりするわけですね。

稲賀：それはもう見事に矛盾しますよ。ただそれをうまく活用できれば、同じ基礎資料を使っても、医学史研究誌に英語論文も投稿できる、社会学の論文も別に仕立てうる、それから日本の歴史学雑誌にも掲載できると、頭がよければ上手な立ち回りの可能性も広がってくる。

黒須：これはすごく大変そうですね。

鈴木：実際、大変ですよ。

稲賀：だから下手に頭が固いと大変です。その辺はやはり入るときの面接でできるだけ学生の適性に見極めはつけようとしています。けれど、さきほども言いましたが、いかに面接で注意しても、指導主任の方の責任はやはり大きいわけで、最低レヴェルとしては指導主任の方に、これでおれの土俵で相撲をとる限りちゃんと一人前になれるから、というお作法だけはまず躰けていただく。これだけは、最低線として必要不可欠ということでしょうか。

黒須：そうすると主任指導の先生が責任を持って、このディシプリンでいくからというようなことで指導されていると。

稲賀：それは個別でしょうか。やはり一人一人の先生や学生によっても違いますね。

鈴木：今のところ、3倍ぐらいは受験者があるので、なぜうちを受けるんですか、何であな
たの大学でそのまま博士号を取らないんですか、と面接で聞いています。いままで、歴史
研究をやってきたんだけど飽き足らなくて、宗教学のアプローチを入れたいとか、そう
いう意志を示さないかぎりとらない。それは日本の学生の場合です。留学生の場合、日本
で博士号を取らないと向こうで就職できないという国もありますので、それに対しては、
また別。何度も言いますが、実態が相手は何をやりたいのかに応じて。

(李偉さん、通りかかる)

稲賀：暇？ 忙しい？ 忙しいようだったら、無理には引きとめないけど。

李：ちょっと荷物を。

鈴木：すでに博士号を持っていて、もう一つ取りたいと言って来る人もいます。だけど日
本人の場合は、ダブルメジャーではなく、自分の隣接領域のことを入れて膨らませたいと
いう程度の子が多い。実際にはディシプリンの違いで股裂きになる場合もあります。

黒須：日本の大学院教育で、今まではシングルメジャーだったけれどもこれからはアメリ
カみたいにダブルメジャーがいいんだとか言う議論がありますけど、こちらではそういう
意味ではもう初めからトリプルメジャーなんですね。3人指導体制ということ。

鈴木：それはちょっとちがう。3人が指導しているといっても実質的に三分野を統合するこ
となんて無理ですよ。実質は、せめて2人ですよ。

稲賀：またそれも場合によりますけれど。ただ、二つのことを補足すれば、一つは受験者
の中に、国内ですと社会人の方がいらっしやったりすると、その人が何を求めているかと
いうことと折り合いが付き、しかも学術水準が合格となれば、むろん入れているわけです。

もう一つ、これもまた入ってこられる方たちに一言断るのは、ここで博士論文を取って
も特定のマーケットに自動的に落下傘で降りられるわけではありません、ということ。ダ
ブルメジャーとかインターディシプリナリーというのは麗しい言葉ではあるし、確かに
個々の研究者には、それぐらいのキャパシティが今、要求されるようになっていきます。と
ころが実際の公募の書類を見てみると、学部の名前はえたいが知れない新学部だけれど、
要求する人材は逆にすごく狭い既存のディシプリンを指定されていることがほとんどです。
とりわけ今みたいな不況期の人文学になると、むしろマーケットの方では、すごく狭いデ
ィシプリンの専門家を要求してくる可能性が高い。だからインターディシプリナリーとい
う歌い文句は「つぶしが利く」ように一見見えるけれど、だからといって本当に就職でき

るかという、必ずしもそうはいかないというジレンマはあるわけで、そのことはちゃんと念頭に置いておいてくださいと、前もって入学希望者に言っておかないと危険ですよ。

黒須：そのお話に関連して入りと出のお話をちょっと伺いたいんですけど、こちらを受験して入ってこようとする学生さんは、以前は領域的にどんな勉強をされてきた方が多いんでしょう？例えば文学部とか経済学部とか、それはもうさまざまであるということでしょうか。

稲賀：統計処理になじむだけのべ学生数にはまだとても達していないと思うのですが、『専攻概要』に今まで無事に博士論文を出した方たちの、出身は明記してありませんが、就職先については、一応書いてあります。けれど一言でその専門分野や就職先の傾向を要約するのは、これはちょっと難しいかな。

黒須：言い換えるとそれだけ多様であるということでしょうか。

稲賀：よく言えば多様ですね。

鈴木：ここは、毛色の変った研究所だというのはみんな念頭にある。端的に言ってしまうと自分の大学で指導教官が気に入らないで逃げてくるケースもあります。それは理系でもあることですよ。最近、誰々先生に見てもらいたいという志望をはっきり定めてくるケースが多い。漠然とであっても日文研の先生たちのやっていることを見ていて、指導してもらいたいという子が多いですね。

稲賀：ここ数年、インターネットでちゃんと情報を見て、この先生にという具合に標的を絞ってやって来る受験生が多くなっているのは事実です。それからもう少し前の傾向で言うと、もっと勉強したいのだけど自分の在籍する大学が修士でおしまいというケースがあって、そうした学生が国際日本研究に受験にやって来る。それから三つ目は今、鈴木さんがおっしゃったようなことで、自分のところの先生と折り合いが悪くて、おまえはあっちに行ってみろと言われるので冒険で来ちゃう、というのはあります。さらに海外は、例えば北京などの場合、基盤機関の日文研の教員は、ずいぶん頻りに北京日本学研究中心に教えに行っています。そうすると、そこの学生が勉強を続けたいということでここを選ぶというケースも何例も出てきます。今、総合研究大学院大学では、特別に予算をつけていただいていますので、海外向けにはわりと学生応募の宣伝を活発にしているわけです。たしかにこれには即効性はありません。何せ定員はわずか3人ですから、統計的には「功を奏した」などという結果がすぐ出るわけではないけれど、個々の例を見ていると、そうした海外の知的ネットワーク形成との関連で、たとえば、李偉さんもその好例ですけど、入学を

希望する優秀な学生が出てきたりはしています。

黒須：そういうお話を伺っていると、何かの領域でそれなりに修士課程はすませてきてそれから入ってもらう。つまり修士を経ていることはこちらで勉強する前提なのかなと思います。いいかえると、5年一貫制というのはこちらにはなじまないのかなという気がする。

鈴木：はい。僕らは五年一貫性は絶対なじまないと、いの1番に言ってきました。

稲賀：だから我々は、5年間一貫制の導入には反対しているわけです。

黒須：やはりそうですか。

鈴木：だって、インターディプリナリーと言っているわけですから、ひとつはちゃんとした訓練を受けてきていないと。あるケースでは、ここを休学にさせて、もう1個のディシプリンの訓練をよその大学の修士で受けさせたこともあります。正規でなくても、近くの大学に頼んでゼミに参加させるとか、私はしています。そのかわり、こちらのゼミも開放しています。5年一貫制で修士からふたつのディシプリンの訓練をするなんてできないです。片一方の訓練がちゃんとできていて、せいぜいそれにプラスアルファすることができるくらいです。

稲賀：紹介します。李偉さんです。今はここでの資格は？

李：機関研究員。

稲賀：機関研究員というので、だから博士論文は去年出したわけだったっけ？

李：今年の3月、前年度です。

稲賀：さっきお庭の話が出ていましたけど、その主題で博士論文を提出した修了生です。それで李さんに一言説明すると、黒須先生に今日ここに来ていただいているのは、狭い意味でのターゲットは留学生ですけども、日本人も含めて論文を書く場合のその日本語の…、

黒須：そうですね。留学生の方々が日本語で論文を書くと内容的には結構レベルが高くて、**「てにをは」**レベルで間違えてしまったりすることがあるので、まずそういうところを無くそうというわけです。先生方がそういう日本語の添削指導までするのはオーバーヘッド、余計な仕事じゃないかと。つまり本当にその中身の指導の方をすべきなのにと

ことです。そのオーバーヘッドと思われる部分を e ラーニングのサイトで少し勉強できればいいのではないかと、という考えでそういうサイトを作っているのです。ただ今日伺ったのは、そういうコースが一応、

鈴木：前提になることなんで、やってもらえればたいへんありがたいですけど。e ラーニングで「てにをは」の間違いを（笑）。

黒須：そうですね。効果 100%とは思いませんけれども。

稲賀：それでうまくいけばね。

鈴木：学生さんだけじゃなくて、一人前の立派な研究者でも外国人で、日本語で論文を書ける人はまずいませんよ。うちでも、まともに書けるのは劉建輝ぐらい。

稲賀：「まとも」って、劉さんの日本語は天才的名文ですよ（笑）。

鈴木：すごく上手に書く人でもやっぱり直すところがありますよ。そういう互いに直しあえる知人を何人かもたないと。僕らだってネイティブチェックを受けるでしょう。私なんかはずかしくて、とても言えないほど直される。稲賀さんは、いらないかもしれないけど。

稲賀：いやいや。ネイティブチェックは必要。それでは、李さんを勤務中にいきなり引き止めていて悪いので。李さんの場合は、国際日本専攻に入学すると、リサーチ・アシスタントじゃなくて…

黒須：TA ですか。

稲賀：ティーチング・アシスタントの方が対応してくださったりするわけですが、今度は李さんご自分がそれをやる立場にも…今はなっていないのか。

李：なっていないです。

稲賀：それからやっぱり北京で修士まで終えて、大学院、博士課程から、日文研に来たわけですね。

李：修士のとき半年間ここで論文を書いた時期がありまして、そのときに国際交流基金の公費ですから TA がちゃんとついていて、このコースに入ってからもうそれがなくなっ

やって、何か先生と。

稲賀：コースではTAはなかったの。そうか。先生が「てにをは」を直すということも含めて指導して下さった、ということか。

李：最初に先生がもちろん内容的に指導して下さったんですけど、内容をチェックする、それと同時にてにをはも。

稲賀：結局そうなるよね。

黒須：日本人でもこうやって話している話し言葉を後で書き起こしてみると結構、文法的に変なところとかあるんですけど。

稲賀：完璧な文語を話すなんて、それは無理ですよ。母語でも、ちゃんとしゃべれ、なんて。むしろ書き起こしをしてみると、外国語として日本語をしゃべる人のほうが、正確な日本語だったりする。でも書き言葉は…

黒須：やっぱり書き言葉になると、書いてからチェックしたりして、完璧な日本語と思うものにして出しますよね。ところがさっき鈴木先生がおっしゃったように僕らが英語で書いた場合、僕らなりには一応書けたと思ってもネイティブから見るとバツバツということがありますよね。それを何とかしたいと。

李：特に日本の学界に投稿するときには内容だけではなくちょっとしたミスでも落とされるから、先生たちはそれがちよつともったいないと思われるかもしれないですから、それでチェックしていただいたんです。

黒須：日本語の質で落とされたんじゃ、ちよつと困りますものね。

先ほどの鈴木先生のお話に戻りたいんですけども、いわゆる5年一貫制の話と関係した続きです。李さんは修士を中国で取ってこちらに来られたということでしたね。修士は通常2年間という短期間ではあるけれども、それなりに一つの学問分野のやり方を身に付けるために必要な期間であるということですよ。要するに学部を出ただけではやっぱりまだ十分ではないと。

稲賀：日本語の特殊性ということはやっぱりあるかな。

鈴木：李さん、どうですか？

稲賀：李さんなんかの場合は大学で日本語をみっちり。まず青島で4年間？

李：はい、4年間。

稲賀：それで修士に入る段階では読み聞きはほとんど何の問題もない程度まで、もうトップレベルの中国の学生さんたちが北京に集まってというのが、北京外国語大学の日本学研究中心の水準です。それでも、私の授業はさっぱりわからなかった、という伝聞もあるのですが、修士入学後2年間で、とにかく修論レベルのものを、これは日本語で書く。

李：はい。

稲賀：だけど、これは本当にもう中国でも語学教育のうえでは、エリート中のエリートだと思います。6年の日本語学習でそこまで行けるというのは。

黒須：青島でも日本文学とか、日本のことを。

李：日本語です。

黒須：日本語をやっていたら6年間？

李：4年間。

黒須：4年間と北京で2年間。

李：北京は2年間半です。

鈴木：北京の場合は留学させて半年は日本語の訓練。国によっても、個人によっても違いますけど、日本語の読み書きができないと取らないもの、僕らは。

稲賀：だからディシプリンということ以前に、留学生の場合はとにかく日本語を道具として使えるところまで、これはまず徹底的に訓練を尽くさないと、とても博士論文指導といったレベルに到達はしませんよね。

黒須：分野はいろいろあるけれども、日文研さんの場合は最低要件として日本語のスキルということになるわけでしょう。

鈴木：日本文化を研究するんですから日本語の読み書きができることはあたり前ですよ。もちろん英語なら英語で論文を出すことは認めています。アメリカで就職するんだったらそうしないと。それはまた個別で。

黒須：今までのお話で見えてきたことをちょっとまとめると、入学するにあたってはまず日本の文化などを研究するんだから日本語が絶対必要であって、所定のレベルまで読み書きできることが外国人としてはトップレベルに近いぐらい欲しいと。

鈴木：だいたいそうなっていますね、事実上。

黒須：それからもう一つは、やはり修士までの過程で自分なりの研究領域についてまずしっかりと勉強してきなさいと。

鈴木：はい。基礎訓練を受けていない子は無理。ちゃんとディシプリンのある大学にどうぞ。うちが引き受ける必要はないという態度できました。

稲賀：要はだから、北京の日本学研究中心の場合、最近ではどこまで当てはまるかは保留つきですが、

鈴木：そうそう、ちょっとね。

稲賀：少なくともかつては、端的に言って東京大学の教養学部・教養学科の設立時の設計理念が、かなり忠実に踏襲されて、これをモデルとして運営がなされていた。つまり言葉についてはもう徹底的に訓練しないと使い物にならない、というのが大前提。しかしディシプリンについてはレイト・スペシャライゼーションでいいだろうという制度設計です。むしろ修士を終わったぐらいの段階で外国に行って、当該分野の一流の先生、日本研究で言えば日本の大学ということになりますが、その先生にきっちり専門分野のご指導をしていただければ、そこから先の博士課程は、もう自分で考えて、やっけて行けるだろう、といった大まかな前提が、かつてはあったと思います。ただし、今は北京の日本学研究中心も、第2世代になって中国の先生方が指導するというかたちになっていますから、今から先、どのような方向に向って行くかは、ちょっとわからないというのが私の感触です。

李さんにせっかくおいでいただいているので、以上かいつまんで説明したのですが、どうでしょう。李さんとしては、自分だったらこんなプランニングを立てれば面白いのにとか、こんな仕組みが準備されていなかったから苦労したとか、何かそうした経験があれば、この機会に言っておいていただければ、役に立つかもしれない。いかがでしょうか。

李：やっぱり博士論文を書くときにもう内容だけで頭がいっぱいですから、どこまで日本

語を追求できるかちょっと自信がないので、特に留学生としては何か、やっぱり日本語を磨きながら内容まで考える余裕がなくてちょっと時間的に限定がありますから。私の場合は、

黒須：李さんはどういう研究テーマだったんですか。

李：私は江戸時代の大名庭園の。

黒須：庭ですか。

鈴木：坪庭ではなくて、いわゆる枯山水の庭ではなくてと。

李：大規模の。

稲賀：最初は庭園史を古いところから全部やってみたい、といった計画だったのが結局は、江戸の大名庭園という、中国ではあまり知られていないものに、きちんと焦点を絞ったわけですね。そこで最初の漠然たる大構想と、今の結果とはかなり違うと思うのだけど。

李：最初に修士論文を書いたのは京都の天龍寺の禅寺ですけど、結局博士論文になるといろいろ本を読んだりしてちょっと違う方向に行っちゃったんです。私の場合は幸いに博士論文をチェックしていただいた人がいまして、それはすごく助かったんですけど、ほかの留学生を見てみるとそれがないと結構困る人がいまして、何かやっぱり 1 人の人に全部頼むとほかの人も負担になるから、自分から積極的に言うのもちょっと言いにくいし、こっちからお金を出すのも貧乏学生だし、どうしようかなとずっと考えるんです。頼むのも先生も忙しいし、一方的に要求するのはあれですから、時々その点で何か暗くなっちゃったんです。もう内容だけでなく、自分は日本語が書けなくなるという何か。

稲賀：内容のことをちょっとお聞きしたいのですが、日本の大名庭園となると、これについての研究は、中国ではほとんどないのではないですか。

李：ないですね。

稲賀：それは逆に、今から例えば博士論文を中国語にして出版するとか、そういうことは考えての選択だったのだろうか？

李：それは考えております。

黒須：先ほど先生方から日文研での研究というのはインターナショナルとかインターディシプリナリーとか、そういった面が基軸になっているというお話だったんですけど、李さんの場合は、例えば中国の庭園と日本の庭園の比較研究というか、そういうことだったのですか？

李：簡単な比較だけではないですから。私の場合は江戸時代の庭園の何かに漢文で書いている文献をたくさん利用していますが、江戸時代の文人たちの書いている漢文は今までの原資研究の中でもちょっと欠けている部分がありまして、それを主に利用して、それで江戸時代の庭園はどんなものなのかということに興味がありまして。

黒須：その漢文というところが中国人である李さんの一つの強みというわけでしょうね。

李：強みとは言えないですけど、たぶん私から見ると漢文は日本読みではなくて中国語として読んでいますから結構すらすら読めるところがありまして、それが何か丹念に読むといろいろ出てくるものがありまして。

黒須：それは日本人が書いた漢文なわけですか？

李：それは日本人が書いたものもあるし中国から来た中国人が書いたものもありますから。

黒須：そういう意味でインターナショナルになっていたわけですね。

鈴木：まあね。

稲賀：だから、最初は蘇州のお庭と比較するみたいな試みもすすめていたのだけ？

李：最初は中国の景観をどうやって日本の庭園の中で表現するのかについてちょっと興味を持っていました。例えば中国の西湖という景観を日本の庭園の中でいっぱい作っていました。それを見立てとして庭園の一つの景観の作り方なんですけど、それがどうやって人間の心理的なものに関係しているかということとか。あと中国との交流とかいろいろ考えて書きたかったんですけど、結局、何か景観だけでは絞りがあまりよくないので、やっぱり一つの時代の庭園に絞って書いた方がいいと思って。でも論文の中に中国の景観の見立てとか、そういう部分も反映してあるんです。

黒須：国際的な視点をその研究の中に入れなきゃいけないというところはかなり意識して、やりましたか？

李：それは留学生としてはそんなに強く意識しなくてもたぶん反映できると思います。それがないとオリジナリティーがないですから。書くときにたぶんもう日本人と違う何かを持っているんです。日本の学生と同じような本を読んでも同じような文章は書けないと思いますから、やっぱり違う文献とかを調べて、違う観点から見る方がいいと思っています。最初からもう違う観点で見ているかもしれないと思います。

例えば関心を持つ部分が違うと思います。あと同じ庭を研究する人であっても日本人の学生だと、たくさん漢文を読んでも同じ発想は出てこないと思います。

黒須：海外のいろいろな国から留学生の方が来ていると思うんですけど、それぞれみんな同じように自分の生まれ育った文化を引きずるといえるか。引きずるってちょっと悪い言葉だな。それをベースにして日本研究をしているという感じはしますか。

李：やっぱりみんな自分の生まれ育った環境からここに来て一番自分と育った環境の違う部分を最初に感じて、そこに興味があって研究を始めたんだと思います。やっぱり引きずったというか、ちょっとあると思います。

黒須：引きずるってちょっと悪い言葉ですけど。

鈴木：それを母体にして。

稲賀：だから、やっぱり最初にはわりと大きな比較をやろうと思っていたのだけど、結局は、博士論文の構想が具体化すると、話題を絞ったわけですね。そこはどうしてかな？

鈴木：それと中国の場合はわりと全体にしみ通っているんです。どんどん強くなっていますけれどね。

黒須：何がしみ通って？

鈴木：中国人が日本文化を研究するなら、どこで中国人の強みを生かすかを考える。日本語研究でも中国独自の立場からやりましょうということが全体にはっきり打ち出されています。日本の文学を研究したら日本人になっちゃうというわけにいかないでしょう。

黒須：やっぱりご自分のアイデンティティーというか。中国なら中国人としてのアイデンティティーをキープしながら。

鈴木：彼女ははっきり言っているけど、ちゃんと自分の武器を、日本人に書けない論文を

書きましようということでしょう。こちらもそれを要求しているわけです。そうでしょう。漢文で書いてある作庭の本があるのに、それがいい加減にしか日本の庭園史の研究の中では扱われてこなかった。特に戦後は漢文を読めなくなっている。だから彼女はそれらの文献を読んで実際に大いに使ったということです。

黒須：そういう研究を李さんはどういう学会に論文として発表して行きました？ 日本の学会、それとも中国の学会。

李：日本の学会では例えば造園学会と比較文学会に入ったんですけど、その二つの学会で発表して、中国では主に国際会議。学会には入っていないですけど北京の日本文化に関する会議とか上海の浙江省の大学主催の国際会議みたいなところで発表したんです。

黒須：日本でも、論文というかたちで発表したり、学会でも発表したかと思いますが、中国で発表するときに、その発表の内容は少し変えました？あるいは発表のスタイルとか。

李：それは違いますね。やっぱり中国で発表するときには、中国に日本の物がたくさん入っているようなところがあって。聞く相手によりますけど日本の学会で発表する時は日本人が主な聴衆ということになります。だからいろいろな意見を聞きたいならそこで求めるものを考えて、中国で発表するときには例えば中国の景観がどういうことなのか、そして日本はどういうことなのか。そういう関連性みたいなものを中国を中心として発表するんですね。

黒須：やっぱり聞き手が期待しているものは何かを考えて、それに合わせて発表されると。それはさっき先生方からお話を伺ったことと一致していると思うんですけどね。

稲賀：ちょっとずらして、英語圏の場合で言うと、今の北米の学会作法では、特に東アジア関係をやるとなったら、専門家ではない門外漢の読者にもわかるかたちできちんと説明して、しかもオリジナルな結果を導くところまで持っていく、という文章作法を要求されますよね。ところが日本でやっている多くのディシプリンの場合だと、学会の共通認識となっている前提のところは書くものではない、という具合に正反対の指導をされるので、そうした導入部は消されてしまう。反対に北米のアジア関係の論文では、その学会の中で共有財産になっている知識もきちんと出発点として書かないと怒られる。そこはもう全然文章作法の基本が違います。そうしてみると、これは中国の場合とはまた別ですが、日本語で発想して書いたものをただ英語に翻訳すればいいというのは、頭の使い方が全く違うことになってしまう。これはただたんに文章のレベルのテクニックの問題などではなくて、それこそリサーチのやり方や論文構成のところから、頭を切り替えないと通用しな

いものになります。その裏にはもちろんオーディエンスの違いがある。というわけで、すべてが連動して動き出すので、かなり大変な話になります。

黒須：ということは、誰に向かって発信するのかを考えて論文を考える。その論文をまとめるためにはどういう研究が必要だからということを考えている。その最終的なゴールとしての論文のために必要な研究や勉強をしていくという。

稲賀：そうせざるを得ないところはかなりあると思うのです。ここにはやはり一種の学会力学が働いていることは事実で、もっといじわるな言い方をしてしまうと、そうした誰にでもわかる文体の英語で書いたものは、そのまま日本語に訳してもらえるので、英語圏の偉い先生が英語で書いた本は、日本の大手の出版社から翻訳が刊行されるわけです。しかし逆は真ならずであって、日本語で日本式に書いた、前提を省略した専門的な学術的文章をそのまま英語に直訳したって、こんなものは英語としてチンプンカンプン、英語圏の大学出版部から世に出してくれと言っても、全く取りあってももらえません。翻訳の片務的な関税障壁ですが、これは厳然たる事実として存在するわけなので。

黒須：やっぱり目標意識が非常に明確になって入学をしてこないといけないという感じですか。

稲賀：だけれど、入学のときには、とてもそこまでは、まだわからないでしょう。

黒須：その辺をちょっと次に。

李：何もわからなかったりして（笑）。

鈴木：入学のときにそこまで持っている人はそうはいないですよ。もっとぼやっとしていますよ。

黒須：他専攻の場合もだいたい1年生のときはまだぼやっとしているという話だったんですけど、やっぱりそれは同じですか。

鈴木：はい。

稲賀：同じというか。

李：1年間模索中。

鈴木：その間に「博士論文って何？」ということ初めて考えるわけです。修士の子たちは博士論文の書き方なんて考えていない。とにかく勉強しているだけでしょう。いよいよ論文を書こうと思って、初めて自分がやりたいことの近辺の領域の博士論文を読んで、こんなことをやらなきゃいけないのかとびっくりしたり、いろいろ悩んだり、その悩み方も分野によって違ったり、先生に相談したりで、1年たつ。そのまま2年間たってやめちゃったのも何人かいます。その悩みの中身と論文作法とが重なっていることもありますね。

李：最初に何も知らなかった段階だと何を読んでも「ああ、新鮮だ」ということで、これをやろうかなと思って論文を読むうちにもう人が書きちゃったというようなことが、結構ありまして。結局自分は何ができるのか絶望的になっちゃって。

黒須：李さんは1年生のときに模索というか、いろいろなことを試したり経験してみたり読んでみたりということをやりましたか？

李：1年、2年ぐらいはずっと何か、今も模索中ですけど（笑）。

黒須：そのときにいろいろなことを勉強したと思うのですが、結局そのほとんど全部が学位論文に役に立ったと思いますか。

李：直接反映できるかどうかはそんなにはっきり言えないんですけど。でも結構、以前読んだものとか学会で発表するときに質問されたことには役に立つところが多くて、それが印象的です。全部論文に書くわけではないんですけど、やっぱり論文を書くときにそのとき調べた資料の説明とか、自分の言いたいことを書こうとすると、それで頭はいっぱいになるんです。

黒須：1年のときがそういう模索の時期だとすると、例のイニシアティブ活動では専攻間の横断連携を心掛けているわけですがけれども、そのあたりはどのぐらい有用になるとお考えでしょうか。

鈴木：そもそもうちはインターディスプリナリー、あるいはインターナショナルだから、そんなのは当たり前になっているわけです。いまさら連携とか言われてもみたいところが……、正直言っちゃうと。

黒須：もともと、つまり他の基盤機関に限らないかもしれないですけど、歴博なり民博なり国文研というようなものとの交流はすでに活発になさっていたと。

鈴木：いや、全然。だって、みなディシプリンがあるのですから。こっちは違うんだもの。はっきりいうと、インターディシプリナリーやインターナショナルな研究によって、専門の壁を壊す。ディシプリナリー、あるいはナショナルな研究を修正するという立場。その有効性が問われるのですから。

黒須：そうするとインターディシプリナリー、インターナショナルでやってこられた日文研の1年生の学生さんとしては、どんなかたちでそういう横の広がりを作っていたんでしょう。

鈴木：やっぱり留学生とかいろいろな分野の人たちと会う場所があって、研究発表をしたり……。

李：1年生のときの学生さんたちの集まりですか。

鈴木：総研大の、前、発表会をやったり何かしていたじゃない。あなたはあまりタッチしていない？

黒須：李さんが1年のときはまだやっていなかったかな、イニシアティブは。

李：まだやっていなかったですね。

鈴木：もう博士論文の書きに入っていて、あなたの場合は免除されているのか……免除という言い方も変ですが。

稲賀：とすると、学生が組織するセミナーとか、先生方が話をするようなセミナーは、まだなかったっけ？ 李さんが入学したときは。

李：1年生のときは確かに一つの専攻に2人担当が選ばれていたし。

黒須：それです。

李：それですか。何か、2か月、3か月ぐらいでしょう。

黒須：梅さんとか、それからあとはロシアのスペトラーナさん。

李：コルネーエヴァはそれだから。彼女たちの代からですか。私は彼女よりちょっと、

稲賀：ちょっと上だからまだなかったのかな。

鈴木：逆に言うと、うちの院生はかわいそうなのです。普通のディシプリンがあるところだったらダイガシミみたいな先輩がいて先生の代わりに訓練をしてくれる。それができないわけです。みんな分野が違うから。

黒須：学生はばらばらということですか。

鈴木：むしろ先輩面して自分のディシプリンで全然違う分野の人を指導するとおかしなことになる。ディシプリンをまたいで指導できる能力を身につけてる人はいないですから。だから、そのところはかわいそうなんです。自分たちで読書会をやったりとかしはいるんだけれども。

黒須：お手本なり指導者が学生の中にはなかなか見つけにくいということでしょうか。

鈴木：これは先生の中にもなかなか……。それなりにはいるわけですが。

稲賀：普通の大学院だったら博士課程に入ればお兄さん・お姉さん面ができるわけです、下に修士の学生たちがいるので。しかし、国際日本専攻はそうした環境ではない、という事実は、これはやはり受験する人たちにも、きちんとあらかじめ申し上げます。そうした不足を補う意味で、基盤機関では「基礎領域研究」と言っていますが、例えば笠谷先生が歴史資料の読み方をきちんと躡けるセミナーをやっておられるとか、松田先生が韓国語を学びたいという学生を集めて授業をやっておられるとか、という「自主ゼミ」相当の仕組みがあります。ただ何しろ、こういう小さな研究所ですから、すべてに行き渡るといふわけには参らない。足腰は、制度としていかにも脆弱ですから、そのことだけは前もって心得ておいてくださいね、とだけは一人一人の学生さんに言わざるを得ないですね。

鈴木：さっきもいいましたけれど、僕なんか近くの大学の先生に頼んでゼミに出させてもらったり、かわりにこちら面倒みたり……とそういうことをしていますが、そうじゃないととても足腰まで見きれない。

稲賀：だから鈴木さんの基礎領域研究などでは、要するに院生レベルのいろいろな大学に跨る院生のネットワークを鈴木さん自身が自前でお作りになっていて、土曜日に極めて頻繁にそうした複数の大学院の院生・学生同士の意見交換でもあればその発表の演習みた

いな、しかも情報の交換もできるという仕組みを見事に作っていらっしゃいますけどね。

黒須：そういうネットワークを活用してとにかく模索しなさい、というのは1年生の時期ということになるんですか。

鈴木：しなさいというわけじゃなくてどうしてもそうなっちゃうよね。1年ではたりない。

稲賀：それがないと、院生たちが持たないでしょう。ある意味でセイフティーネットでもあるし、自分たちでそれをうまく活用していけば、そこからさまざまな学会へと人間関係も広がっていくわけですから。それに、こうしたネットワーク作りのノウハウというのは、自分の体に身に付けておかないと、今から先、とても生きていけない世界ですから。

黒須：そういう模索活動をしている中でだんだんテーマ設定をすることになると思いますが、そのテーマ設定をすると同時に、最終的にどういうかたちで論文をまとめるかという、その論文としてのまとめ方のイメージも作り上げていかなきゃいけないという。

鈴木：みんなやりたいことは最初からある程度はもっている。が、専門分野の本を読んでゆくと、彼女も言っていたけど、すでに書かれていたりなどということがあり、2年かかる人もいる。見通しをつけながら、論文は部分的にまとめていかなきゃいけない。それでその後2年間ぐらいはかかっちゃうわけ、それでもう3年はおしまいと。

黒須：その学年進行の話とも関係するんですが、いちおう標準で3年という年限を設定していますけど。

鈴木：だからうちは、今の水準を求めていると、3年は無理ですね。

黒須：無理ですか。そうすると標準的には日文研ではだいたい5年ですか。

鈴木：はい。僕は5年だと思っています。だけど、ディシプリンのあるところでも、ヨーロッパはエラスムス計画で標準化が進んでいますが、ヨーロッパの連中と話していても、ヒューマニティーズのドクターはやっぱり5年はかかると言っています。

黒須：湯川先生もおっしゃっていましたが、外国ではやっぱり標準年限3年はちょっと短いという話もありますね。

鈴木：うんと水準を下げるのなら別ですよ。

稲賀：文系の場合はちょっとね。

黒須：レベルをですか。

鈴木：はい。ドライビング・ライセンスをこのぐらいであげようという水準。東大の駒場とかだったら3年でも出せる人は出てくると思うけど。それは、そういう人たちが集まってくるからでしょう。

黒須：それは学生さんの質という意味ですか。

鈴木：そうです。私学の文学部の卒業生のトップは東大の大学院にゆくというコースができていた。そういう連中が集まってごちゃごちゃやっているだけで賢い子は鍛えられる。いまは囲い込みも激しくなっていますが。

稲賀：ただ難しいところは、早く論文を仕上げてしまいなさい、とせつつくと、ある意味で小さく、こぢんまりとまとまってしまう、ということはあるのです。だからそこは勘所で、やはり一人一人の人の資質を見極めないと、早くできたけどおかげで大器晩成にならなかったといった結果になりかねない。院生一人一人の適性は本当に、学生の数だけ違いますから、例えば1か月に1篇ずつ、書き上げた章を持ってきなさいというと、自動的に博士論文ができあがってしまう人もいれば、つまみ食い材料だけはすべて集めてしまうのだけれど、博士論文という建物を建てるのには、もうどの部品をどこに組み合わせて、といった指導を事細かにすすめて、手取り足取りで配線図を作って面倒をみないと収拾のつかなくなる人もいます。それから、トップクラスの大学院だったら、3年間何もしなかったのにあと半年でぱっとできちゃうというやつも出てくるし、これはもう本当に…

鈴木：それとはうちは全然違う。だって日本人の場合、その大学で落ちことされたのが来るんだから。はっきり言って。その理由はいろいろですよ。頭が悪いとかそういう話じゃなくて、指導教官と合わなくて大学の制度から落ちこぼれた子が来ているんだから。もちろんドクターのないところからも来ますけど。

黒須：そうすると、その学位論文の先生が期待する水準とか、粒の大きさですね。

鈴木：はい。

黒須：学位論文として、さきほど稲賀先生があまり小さくまとまっても先に行って伸

びないと仰いましたが、その意味で、ある程度要求される粒の大きさというのがあると思うんです。その大きさ自体は東大の場合と日文研の場合では同じだけど、それに要する時間がかかるといふ。

鈴木：そこは、本当に人によって違う。その指導教官によっても、うんと大きく育てようとする人と、このぐらいでいいよという人というから、そこはもう教育者としての勘みたいなもので、この子だったらここまで書けるとか、早く出しちゃった方がいいとか。そこは、大学によってもかなりちがう。東大文学部だったら3割くらいといっています。7割は落としているという意味です。

黒須：学位論文を7割落とすんですか。

鈴木：そんなものですよ。

黒須：落とされた人はまた書き直すわけですか、それとも。

鈴木：よく知りませんが。あきらめて社会に出ていくわけでしょう。

黒須：そうなんですか。すごいですね。

鈴木：すごくないよ。みんなそんなものだよ。博士課程をもっていて博士を出していないところは山ほどあるでしょう。逆に甘くして通しているところもある。それがいまの大学院のそれぞれの政策でしょう。うちは、かなり出せています。それは外国人の留学生たちはすごい。学位論文をもぎ取ってでも帰るという根性がある。日本の学生はそうじゃないもの。見ていてわかるでしょう。ふらふらして。できなきややめちゃう。

黒須：その辺は原稿から削除しなきゃいけないですか。

鈴木：載せていいですよ。本当のことですから。日本の大学の学部や修士課程を知っている留学生は、日本の学生には、覇気も何もないと素直に言ってくれます。

稲賀：ハングリーな精神というのはもう全く、今の日本社会からはなくなっちゃっていますから。

鈴木：向上心、向学心のちがいです。いまの中国だったら、ちゃんとステップを踏んでいけば就職できます、大学の先生になれる。それが目に見えてあるわけです。日本は、それ

をはっきりさせていないでしょう。うちが何とか生き延びているのは、いまの大学の再編の波の中でニーズがあるからです。文化史研究で博士論文を取っている子はなかなかいないですから。そこは幸いなんだけど、そんなに積極的に売り込みはしていません。ただし、できた論文をちゃんと一応、学術論文として商業出版できる、もちろん文部省の学習の援助金を取ったり助成金を取ったりもしますけれども、とにかく人の目に触れるものにさせる。それが、ずいぶん就職には利くみたい。文学部系はとにかく著書を持っているかどうかというのが、いつまでたっても就職の基準になっているんです。

黒須：査読つき論文よりも著書、単著ですか。

鈴木：単著でも共著でも、かたちにして出すことですね。そこが理科系とは全然違う。教授会では、Eレビューなんかではなく、単著を持っているとか共著でも立派な単行本に掲載しているというのが判断材料なのです。中身じゃなくて、そういう心理が働くのです。

黒須：日文研が扱っていらっしゃるいろいろな領域は、ほぼ共通してそういう文化風土になっているのでしょうか。

鈴木：地理学のGISなどは全然違いますけども。そこはほとんど情報系の……

黒須：理系に近いですね。

鈴木：そういう分野は全然違うけども、僕らは就職の世話をしあげられないので、多くの人文系、社会系では、そういうふうにしておいた方が、今は公募が多いから就職しやすい。そういう指導をしましょうと。みんなで申しあわせているわけではないのですが、わりとはけているのはその努力のおかげだと思います。

黒須：出口の方から見ると、皆さん、それなりに就職口を探して頑張っているらっしゃると。

稲賀：李さんは、勤務が忙しかったら、このあたりでいいけど。

李：はい。

黒須：論文の方へ少し話をシフトしますと、その論文にはたぶん分野によっていろいろなスタイルがあると思うんですが、そういうのを学ぶのは、要するに先輩たちの書いた論文を読んで学んでいくのが一番基本になりますか。

鈴木：普通はそうでしょうけどね。

稲賀：李さんはどうした？ 先生にこうしなさいと言われたというようなことはないよね。北京で勉強していたときには、特定の学会のために何かを書くなどという訓練は、もちろんまだしていませんよね。

李：していませんね。

稲賀：日本に来て博士論文を書いていく途中で、はじめてそうした…

李：やっぱり最初は本を特に選択しないで読んでいって、あとはもう関心のある論文を読んで、結局書くときはやっぱり論文の書き方とかみたいな基本の図書を最初に読んで。

黒須：李さんもそういう本は読まれましたか？ 科学技術論文の書き方とか理工系はわりと多いと思うんですけど。

李：文系もありますね。いくつか。

黒須：それは先生方も推奨されているんですか、そういうものをまず読みなさいというのは？

李：先生たちの推薦ではなかったですが、たまたま本屋でこういうものもあるんだというように、いろいろありましたから、これが最初に読むと書くときに参考になるんじゃないかなと思って。

稲賀：それは自分で見つけたわけ？

李：『論文の書き方』ですか。

稲賀：誰の書いた『論文の書き方』？

鈴木：いっぱいあるから。

李：いっぱいありますね。

黒須：人文系とか社会科学系とか分野によって書き方はだいぶ違うんですけど、李さんが

見つけたのは人文系の、たまたま？

李：主に人文系の。

黒須：あるんですね。

李：あります。何冊か何か有名なものもあります。ベストセラーみたいな。

鈴木：そういうのが役に立った？

李：それは基本とは言えないんですけど、やっぱり多くの論文を読むのが一番いいと思います。

黒須：やっぱり論文を読むのが一番ですか。ただ、論文にもいろいろなスタイルがあるし、いい論文もあるし、一応審査には通ったけどあまりよくない論文もある。その辺の見極めというのは先生が教えられるんでしょうか。これはこの点ではいいんだけど、書き方はちょっとまずい、みたいな。

稲賀：それも個別で、これは私の主観的な印象ですけども、ここ 20 年間でいわゆる投稿論文というのは、書式の形式的要件ばかりがやたらと、こうるさくなってしまった、という事実はあると思うのです。しかもそれは、さきほども言いましたけれど、投稿媒体によって一々異なっていますから、学習不能です。そこはもう必要悪の形式要件、論文が受理されるための前提条件だと割り切ってやるしかない。北米なんかの場合だったら、どの雑誌に投稿するののかによって違う編集用ソフトを売っていたりしますよね。これはどうやらああした電子機器が発達してしまったところから、かえって形式面が徒らに面倒くさいことになってしまっという悪循環はあると思うのです。枝葉末節の技術面が異様に発達してしまったものだから、それこそ論文として良し悪しの見極めが、逆に難しくなってやせ細ってしまっているという印象がある。将来、学生を育てるという教育的な見地からして、本当に今の技術偏重の傾向はいいことなのかな、というのは疑問に思っています。

鈴木：『文化科学研究』のほかに、ここには『日本研究』というレフェリー・マガジンがあって、これに 100 枚くらいのを載せさせます。査読を受けますのでアドバイスもついてきます。実際にはそのハードルを越えていくことで訓練はできてくる。査読者によって千差万別なことを言われるわけですから。

黒須：確かにそうですね。

鈴木：そして、彼女が言ったように学会発表をして、どんなリアクションが返ってくるか、技術的なことなのか内容的なことなのかの判断もつくようになり、それが訓練になっていくわけです。

黒須：その査読付きの論文誌の論文と、それから学位論文と、これは分野によると思うんですけども、こちらの専攻の場合ですと、その書き方はかなり近いと考えてもよろしいでしょうか。

鈴木：学会論文では30枚くらいでしょう、そんな論文を10本や20本集めても博士論文にならない。博士論文の目次を考えながら、100枚の論文を3本書き、全体に補うべきところを補ってまとめなおせば完成する。個別テーマの個別研究をパッチワークしても博士論文にはならないということです。抽象的にいうと一つの世界を作るということです。

黒須：それは400字の100枚、それともA4の、

鈴木：400字詰めで100枚。それに査読をかける。査読は必ず外の人に出します。

稲賀：おまけの一つは今、学会誌では、論文1本の紙面がすごく限られてしまっていて、

鈴木：30枚とか25枚とか。

黒須：400字で30枚ですか。割と短いですね。

稲賀：本当に煮詰めた上澄みぐらいしか出せないでしょう。それはいったんもう出来上がった研究者にとってはいいかもしれないけども、博士論文をまとめようという学生に対しては、博士論文の仕事とは違う性質の仕事を過重に要求されることにもなりますね。

鈴木：僕は、はっきり言っています。ちゃんとした査読をしていない学会の学会誌は読むなど。そんなものを読んでいると、論文の作法も、アプローチも、発想もダメになるばかりだと。

李：造園学会だと一つの論文はA4の4枚以内に収めないといけない、図面とかも全部入れて4枚以内ですから結構きついですね。

稲賀：造園学会とか建築史学会などは、理系の学会作法、パネル発表の形式にすごく近い。

あらかじめフォーマットがきちんと決まっています、この中とにかく圧縮しないと学会の発表をやらせてもらえない。

黒須：論文で4枚というのはちょっと短いですね。普通は6枚か8枚か。

稲賀：アフリカ学会などでも、発表時間は10分とか、ほとんどお医者さんの学会みたいになっちゃっていますから。それに対しては『日本研究』という媒体は、

鈴木：自由。

稲賀：むしろ今のところ、

黒須：上限なしと。

鈴木：上限なしと言ったって300枚と言われると、これは本にした方がいいでしょうと。

李：本にした方がいいです。

鈴木：本になるまで100枚ずつ3回に分載させていただきますとか、そういう対処はしていますけど。

稲賀：だからピアレビューのチェックの書式ですね。それは鈴木さんが委員長時代にずいぶん工夫してくださったので、書式の話と内容の話とをきちんと分けてチェックポイントを設けているから、査読結果報告を読むだけで、投稿者にはブラッシュ・アップのために何が要求されているかが、きわめて具体的にわかる。むしろ、これも匙加減次第であって、あまりチェックポイントを項目別に列挙しすぎると、かえってこれに縛られちゃうので、そこまでは四角四面にしていますが、経験のある査読者ならば、ここが大切だよという助言や訂正要求を、わりと自由に突っ込んで書けるように、査読書類を工夫してきたわけです。この設定は、今のところ現行のものでうまく機能している、という感触です。

鈴木：『日本研究』が年に2回、それと文化科学研究科の『文化科学研究』が1年に1本。だから年に3回は投稿できる。そういう装置を作ったんです。

稲賀：それに加えて、プラス特定の専門学会はもちろんあるわけで、それらの媒体をうまく使えば、何とか博士論文の完成に漕ぎ着けるはず、という設計ではあるのですが。

鈴木：そもそも査読者の選び方からなるべく外に出していますから。もううちはそれが一

等楽なんですよ。

黒須：例えばメディアの場合ですと、論文提出資格要件に査読論文 1 件というのがありますが、だいたい 2~3 報書いていて、その 2~3 報のうち、これは第 1 章に相当し、これは第 2 章に相当し、みたいに積み重ねてゆく。それは同じですか。

鈴木：全体の構成を考えながら手をつけやすいところからやっていくという、それは同じですけどね。

稲賀：それが器用にできる学生さんもいれば、そういうのは皆目駄目な人もいますから。

鈴木：そう、できない子もいる。

稲賀：やっぱり 1 章を書かないと次の章が思い浮かばないというタイプもいれば、全部目配りしたうえで、一気に部品を突っ込んで、全体が一挙にぼっと浮上してできあがるようなタイプもいて、それはもう千差万別、一人一人違いますから。

鈴木：人によって違うし、テーマによっても違うから。

黒須：先生の指導の仕方も違ったりしますか。

鈴木：そうですね。

黒須：ただ、やっぱり全体として何を最後に言いたいのか。そのためにこれとこれが必要でこうなっていくという筋書きがあって、その全体の骨組みを最初の段階で作るように指導されているのでしょうか。

鈴木：僕は 2 年目ぐらいには目次をつくれといえます。仮でいいからと。こういうものを目指すという目標を作らせるということです。

稲賀：先週、総研大全体での教育への取り組みの検討という席で、それぞれの専攻でどのような具合にやっていますかと、専攻ごとの現状を全部まとめて聞く機会がありました。そこで分かったのは、博士課程 1 年目で目次案をとにかく出せるところまで指導しているという事例が、文化科学研究科の場合はわりと多くの専攻に共通して見られる、ということです。ただしこれは、常に目次案を練り直すという頭の働かせ方をしないといけないよ、という意味の指導であって、結局のところ、論文の本文を書きだすと、それにつれ

て、目次案もまた、どんどんモディファイされて変わってってしまうのが普通でしょう。

鈴木：新しい資料が出てきたら、これで 1 章増やしましょうとか、そんなことはしょっちゅうあります。

稲賀：論文提出寸前の土壇場で、この部分は落とした方がいいから、将来別の論文にしないとか、そうした指示は臨機応変に与えて指導してゆかざるを得ない。部品はやがて生きるでしょうけど、現在の博士論文に入れるのが得策かどうかという判断は、やっぱり論文指導のなかで、個々に見て行って、指導教官の側で下す、ということになりますよね。

黒須：先生のおっしゃった会議というのは教育研究評議会ですね。

稲賀：もう延々とやりました。ついこの月曜日ですか。面白かったけど（笑）。

黒須：特に理系と文系で違うところ、あるいは文化科学の中で日文研さんが違うところをお感じになったときはありますか。

稲賀：ちょっとそこまで突っ込むには資料があまりに古すぎたのが残念でした。つまりここ数年、点検評価の書類の書式が学位授与機構で変更されたために、専攻ごとの報告書類が出せなくなってしまったので、結局、黒須先生が研究科長のお立場で全部整理し直して、研究科として統一した書類を作っていただいたでしょう。ということは、専攻ごとに尋ねようにも、ここ数年はもう専攻毎の公式記録がなくて、研究科レベルの書類しかないものだから、教育研究評議会の席では、それ以前のお古の書類しか出てこなかったわけです。

鈴木：だって理系は実験をやって新しいデータを出して、それが勝負じゃない。

李：そうなんです。最近山田先生のところで GIS を使う人がいて、その理系の人と一緒に論文を書いたんです。京都の庭園に関するその分布図みたいなものを。

黒須：つながるわけですね。

李：私は歴史的な部分を書いて、彼はその GIS を使ってそういう分布みたいな。

鈴木：測定みたいなこと？

李：2 人の発想が全然違って、彼の場合はそのデータベースを作って、もうそれで論文にな

るみたいな話でしたけど、私は違うでしょう。何か別のものを、以前、人が話していなかったことを出さないと論文にならないでしょう。オリジナリティーはないでしょう。分布図だけ作って何が役に立つのと。

鈴木：違うんです。仮説を立てて、出したデータがオリジナル。誰も集めたことのないものなら。

李：そのデータには標高とか経度とかを入れたんですが、確かに作った人はいないんです。でもそれだけで論文になれるかどうか、そういう何か基本的な部分から 2 人は意見が食い違って。

黒須：李さんからすればそれは研究じゃなくて作業だと。

李：私は最初にそう思ったんです。結局何か 2 か月ぐらいつと延々に議論して。

鈴木：それは世界が違うんだから。

李：それで、すごい両方ともカーンという。

黒須：李さんにとってはカルチャーショックだったわけですね。

李：本当にカルチャーショックですよ。

鈴木：だからそういう意味で理系は簡単なの。3年で博士論文が出せるんです。

李：でも、その地形のこともいろいろ勉強できたんですから、それはそれですごい勉強になったと思います。

稲賀：それこそ江戸時代、19世紀の始めころには、戸山荘から富士山がどれくらい見えただか、といった眺望の復元をするのにはGISを使うのはいいかもしれない。

李：これからその作業はやりますよ。

稲賀：だから李さんの場合は、あくまでも自分が立証したいことの補助にインフォメーションとして使えばいいんですけど、

李：私はそんな感じですよ。

稲賀：向こうはそれを立ち上げることに意義があるのだから。

黒須：そういう文化の違いみたいな。

鈴木：それから英語の論文なんか、英語の質も全然違いますね。そういう言い方はちょっと失礼だけど、お医者さんとかの論文は、そんなに英語の質なんか問われない。だけどやっぱり人文系だったら中国語だって、ただ読めればいい、というものじゃない。立派な中国語でやらないと先生として尊敬されないみたいなことは、いつまでもつきまとうでしょう。そういうことを考えると博士論文には、やっぱり最低限 5 年はかかるという話です。歴史学とか美術史なんかでは、新しい資料を出さないと話にならないみたいなところはあるんだけど、資料批判をして、この資料が見つかったことは歴史学の今までの定説をこう変えますとか、その意義みたいなものを説けばすむ。そこは同じですが。

黒須：理系の方にはまたそれなりの言い分があると思いますけど。

鈴木：先行研究に見落としがある。データの数が足りない。これでは母集団が少なすぎるなどなど。

李：私はいつも言われるんです。単純明快にこうよ、難しく考えずにとか。

鈴木：それが勝負なんだから。

黒須：いよいよ最後の論文を書くという段階になったときに、論文体系として機が熟してきたと。もうこれでまとめていいという判断はやはり何となくわかるものではないでしょうか。その辺はもう、学生さんが出したいという感じで出してくるという。

鈴木：目次を作らせて、個々の論文を書かせて行って、もう書けるでしょうという。

黒須：目次を先生方が何回かレビューされて。

鈴木：個々の論文を出させながら、目次も変えて行って。

黒須：そうですね。その目次はどのくらいの細かさのもの、解像度というか。

鈴木：それも個々のケースで違うよね。

稲賀：全体の量が 400 字原稿用紙に換算して、うちの場合は何ページぐらいですか。決ま
ってはいないけれど、いくら少ないからといっても、

鈴木：300 や 500 はみんな書いている。

稲賀：300、500 はいきますよね。やっぱり一気に全部ということは、量の上であり得ない
から、そうすると全体も見わたしつつ、今どこの部分にコンセントレートするのか、とい
う調整は、指導主任の側で、ある程度は見込みをつけてあげる必要はあります。そうした
指導などしなくても大丈夫な学生も中にはいらっしゃいますけど、大多数の学生は、今ま
での人生で、そんな膨大かつ複雑な執筆・編集など、一度もやったことはないわけだから。

鈴木：だからデータベースを作らせて、それが 5 割。それ自体に価値がありますよと。そ
れに作文をくっつけてというような通し方もしています。そうしないと書けないという子
はいっぱいいる。

黒須：あとはその骨組みをきちんと書いていって、これはここにはまる、これはここには
まる。ついに最後のこの辺にはまったから、それで論文として出していいだろうと。そん
な感じに、その予定というか先が見えてくるということですね。

あと論文を書くスタイル。これは先ほど稲賀先生が、分野が違うのもいろいろなス
タイルがあって、ある先生がいいと言ってもほかの先生が駄目だと言うしということがあ
るということでしたが、先生のお考えはいかがですか。

鈴木：スタンダードなスタイルなんかあるかな。

李：スタイルは決まっているんですか。自分の好きなスタイルでどうだということ。

黒須：日文研スタイルというのはないわけですね。

鈴木：ないです。査読者によっていろいろ言われて、こういうんじゃ通用しないんだとか。
それが分野によって違う、日文研は自分の分野に縛られずない査読の仕方をしますと切り
替えをしてくれる先生もいるし、自分の分野の方式のままで、こんなのは全然通さないと
か、いろいろで、それはしょっちゅう食い違っています。ただ、そこはもうあとは委員長
の判断です。私は基本的に学術論文として通用するかどうかは、手続きの問題だと思っ
ていません。論証すべきことは論証する、実証したいことは実証する。その手続きがき

ちんと踏まれているかどうかしかない。

黒須：つまり判断としては形式よりはその中身ということでしょうか。

鈴木：『日本研究』は、標準形式を作っていますから、それだけは守らないと。

黒須：分野によっては形式をうるさく言わない分野もありますね。でも日本研究はそのスタイルを作っていらっしゃるわけで、それは日文研スタイルというふうに言ってもいいわけですね。

鈴木：何年もかかってつくってきたものです。分野によってちがいがでないような形式を。

黒須：非常に些末なことですが、例えば共著者がいたときにそれを中点で区切るようなスタイルもあればカンマで区切るスタイルもあるし、文献リストで、年号は西暦で頭の方に入れるとか、お尻の方に入れるとか、いろいろなスタイルがあります。そういうところはその人なりに統一してあれば基本的には構わないということでしょうか。

稲賀：だからいづこも投稿規定は作るわけで、当然うちにもそれはあるわけです。

黒須：それは『日本研究』に関する投稿規定ですね。

鈴木：そうです。

稲賀：もちろんそれはしょうがないでしょう。そこは何とも、そもそも縦書きにすべきか否かということだけで、議論を始めれば、もう大騒ぎになっちゃうわけです。だって数字を全部やり直さなくちゃいけないわけですから、もう馬鹿らしいったらありゃしない。

鈴木：うちは横書きでも受け付けていますよ。

黒須：縦横混在というか、人によって違うわけですね。

鈴木：そう。文化科学でもそれでやっているでしょう。だから別に。

稲賀：できるだけそうした瑣末なところでつまらぬ問題が発生しないように、というので仮に設定した、というところでしょう。だけど個々のディシプリンにうるさい方からは、何でそんな書式なのだと、いつでもお小言や文句を頂戴します。それから今度は学術雑誌

としての書式の統一性ということにすごくやかましい方もいらっしゃる。とりわけ北米の英語学術雑誌の編集者には顕著です。けど私なんかは、あまりそこに入っていきたいくない。というか、日文研だけで通用する規定を作ったって、汎用性はないわけですから。

黒須：日本研究は縦書き・横書き混在ですか。

稲賀：両方とも受け付けているということです。

鈴木：英語は別の『ジャパン・レビュー』を出しています。

稲賀：英語の方は現在のところ『モニュメンタ・ニッポニカ』のスタイル・シートに則ってやっています、一応、今はそれしかないと思っていますけど、私個人は『モニュメンタ・ニッポニカ』の書式が一番いいとは、露ほども思っていません。けど、代替案のアルタナティブを出すだけの才覚があるかといわれると、それは困っちゃう。

だから仏教研究、オリエンタル・スタディーズと言いだしちゃうと、結局要求がどんどん膨れ上がって行って、どういう原稿が出てきても大丈夫という書式を設定すると、原稿作成があまりに煩雑でひどく面倒くさくなる。だってあれはスタイル集だけで1冊本ができてきちゃっているわけでしょう。

黒須：心理学ではAPA(American Psychological Association)のガイドブックなんかもありますね。

稲賀：それを全部読んでいなければ投稿できない、なんていうことは、当該の編集部(エディトリアル・ボード)の人でなければ、そんなものは頭に入っていないわけだし、それをみんなに要求することが日本研究の上で必要不可欠かという、私はそこまでの意見ではないのです。フランスならフランスでスタイルは違いますから、これは収拾がつかない。

黒須：先ほど鈴木先生からは本にまとめるというお話が出ました。それは専攻としても推奨していること？

鈴木：公的な会議では話し合ったことはないですが、その方が今のところ就職には効果的ということですよ。

黒須：例えばキャリアプランというか、まず論文を書いて、学振のPDを取って、それでその間に本を出して、それから就職というような。ある意味での理想モデルみたいなものはそんな形になるのでしょうか。

鈴木：これまでに学振を取った子は 1 人もいません。プロジェクト研究員など、ポストドクターの職があつて助かっていますけども。そのあいだに就職先を探すか、日本人の場合は海外の職に出る。けっこう引きがありますよ。

黒須：それはいいことですね。

李：いいことを聞きました。

鈴木：それには、博士論文を、ちゃんと本にして。

稲賀：だから日本専科なんて言い方を中国語圏だったらしますし、韓国の場合も同じで、それら隣国のマーケットへの就職口は、現在では日本国内市場よりもむしろ潤沢にあるぐらいです。そうした就職口を目指すとなれば、うちのディプローム（博士課程終了証書）を持っていれば「国際日本専攻」とちゃんと明記されていますから、それは国際的な「日本研究」の就職戦線のうえでも有利でもあるし、証書をもっているということは、それなりのトレーニングは結果的に受けているということの証拠にもなります。昨今の教職ポストの応募では、最終的には博士論文を持っている人同士の競争になりますから、かりに期限付きのポストであるにしても、諸外国の公募に積極的に応じたいという志向のある博士号取得者は、わりと高い確率で就職できることになるでしょう。それに、若い間にそうした海外の勤務地で経験を積むことに、我々教員側としても積極的な価値を見いだしています。もちろん、ご家族持ちで、早く日本に帰りたいと奥さんが小言をおっしゃる、とかといったケースはあります。けれど昨今では、例えば日本文学では日本国内よりもむしろ台湾をはじめ、東南アジア、韓国などの方が就職条件も良いし、若手の実力者には海外で頑張っていらっしゃる方が多い。これは外に出てみて実感として観察できることです。

鈴木：日本文学なんていうのはもう国文研と違って、うちはやっていることが本当にけんかだから。岩井君なんてもう全然話にならないぐらい。学会の中でも支持してくれる先生はいないわけではないですけども、そういうのだったらもう国外へ出て 3 年か 4 年、先生をやって、そのキャリアを持って国際的なそういうことができますというのを売りにして大学の先生になってもらわないと、まず。

黒須：何となくなんですけどお話を伺っていて、この日文研さんの風土は何かとてもユニークだなという印象を持ちました。

鈴木：先生の仕事の質が一人一人違うからね。

黒須：何か非常に挑戦的。

鈴木：それに振り回されると困ることにもなりますが。

黒須：先生方自身が非常にチャレンジングであると、そんな感じがするんですけど。

稲賀：本来それを前提として作った専攻だから、もっとそうでなければいけないはずなのです。ただ、先生たちがチャレンジングな精神を持っているからといって、学生の指導がうまくいくかという、それはちょっと別問題かもしれない。心持ちとしてはいいかもしれないけど、それこそ制度的なケアということでは、かえって危ないということは言わざるを得ないわけです。それは裏表の関係ですから。ただ、先ほども言いました国外のマーケットの発展ということは、言ってみれば日本国内ではあまり予期していなかったことが今、起こってしまっていて、たまたまそれに今のところ平仄（ひょうそく）が合っているように見えるのかもしれない。もっとも長期的に見れば、今や「文学部」は日本国内では絶滅危惧種になってしまいつつあって、次々に「国際何とか学部」に看板を架け替えているわけですから、そこで院生が皆さんディプロームを取るようになれば、似たりよったりの名前のディプロームを持った人たちがたくさん発生してしまうことにはなります。けれどその人たちに、皆おしなべて就職先が見つかるか、というところ…

鈴木：そう、それはわからない。

稲賀：わからない。名前は「国際」だけど本当に国際競争力があるかどうかというところ。

鈴木：いまの大学は、日本文化学科と名前は変えました、でも、かつてと同様に国文学なら国文学の先生は残っていました。その人たちが、リタイアすると、ここに、うちを出た子たちが結構はまるわけ。それはしかし、いまのところであって、その先は稲賀さんが言ったようにどうなるかわからない。

稲賀：逆にそれで平準化しちゃうと、何が何だかわからなくなっちゃいますから。

鈴木：そうそう。今度は別のものが必要になるかもしれない。

稲賀：今はたまたまうちが 1 歩先を行っていたから、次のときのポストで少しはいい目を見るかもしれないけれど、永遠にそれが繰り返されるなんていう保証はどこにもない。

鈴木：だって出ていった子どもたちが育てた子たちはそこへと出るわけだから、そこは埋

められないわけでしょう。

稲賀：だからやっぱり一般論としては通用しませんけれど、さきほど紹介した、ちゃんばらを研究してフィルム・スタディーズでうまく就職口が見つかった博士号取得者、小川順子さんの場合には、自分のやりたいこととマーケットの状況とがうまく具合に連動して、今のポストに就くことができたということで、それはいい例ではあるけど、それでは 2 匹目のドジョウを狙えるかといったら、制度としては、とてもそうはいかないですよ。

黒須：そうですね。確かに。

稲賀：だけどある程度国際的状况を見渡していれば、日本の場合、フィルム・スタディーズはもっとなくてはいけないのに、制度としてすごく遅れているということはある。もっとも北米の経験者などから見れば、北米でこれだけ流行っているのだから、次は日本でもそれなりの需要が生まれるだろう、という予測は、目先が利くなら、10 年前から立てることができたはずですよ。

黒須：それから、先生方はチャレンジングだけでも教え方にそれがうまく反映されているかどうか分からないという話。

稲賀：教え方というか、そうした闘争的精神を受け継がせるのはいいけれど、それで世の中、渡っていけるかといったら、世の中の制度はそうはなっていないわけですから。

黒須：もうちょっと具体的にお伺いすると、差し支えない範囲で？

稲賀：だからさきほどの「ちゃんばら」の博士論文にしても、私はたまたま大学院の教授会で報告したからよく覚えていますし、いまだに思い出すと冷や汗ものですが、あの博士号審査ではすごく多くの反対票が入っちゃったわけです。「チャンバラ映画の研究」など、そんなものを作って何で博士論文かという意識が、研究科の中にだってまだあったわけでしょう。文化科学研究科の場合は教授会の席では、必ずしも専門家ではない人（論文公開審査主査）が審査経過報告を担当して、それを審議するわけですから、いつでも論文の真価がきちんと教授会構成メンバーに着実に伝わるか、という面での危うさはあるわけです。

黒須：あれは教授会の審査システム自体の問題だという気がしています。そもそも 3 分、4 分の話で賛成・反対の投票をするということにどれぐらい妥当性があるか。

稲賀：それは本当に大きな問題で、4 時以降に、別の席でこの件は、多少詰めることができ

ればよいのですが、それはそれとして。先ほどの質問は？

李：反映できるかどうか、先生たちの指導を。

黒須：そうそう。

稲賀：そこに戻れば、しょせん専攻の売れ口に合ったマーケットを世の中に作る場所までの力は、専攻には到底ないわけですから、そうするとそこから先はある意味でマーケット頼みとなるのは否めないわけです。しかしだからと言って、売り込み先のマーケットに妥協したような指導をしておれば、それでよい、とも参らないわけですから。

鈴木：ありていに言うと、この日文研の活動が活発に行われていれば海外の先生方は来たいわけです。あるいはシンポジウムに呼んでほしいとか。そういう言い方はちょっとおこがましいけども。そういう人たちは、いまは、いっぱいいるわけです。それが動いているかぎり、ここで学位をとった子たちの就職も有利になります。中国では今度も如実に感じてきました。同じレベルだったら、何らかのパイプを持っている子の方が有利になるし、またその人たちが集まってきて成果をぶつけあっていけばよいということです。総研大と、今のところそこが何となくうまく回っているみたいという感じですね。アメリカについては、そんなふうになっていないけれど、ヨーロッパにもそれはある程度あると思う。それは博士論文の仕上げに先行研究と原典のチェックに日本に1年行っていらっしゃいという先生が、ヨーロッパはベテランの方にはあって、それを積極的に引き受けるべきですね。うちの図書館は外国の研究者が資料にあたるのにいいと定評があります。だからそれがうまく動いている間は大丈夫だと思っているんです。わかりやすく言っているだけです。よ。例外のケースもいっぱいあります。

黒須：日文研がそれなりに意義を認めてもらって。

鈴木：その装置が動いているかぎり、大学院の方もうまく動くでしょう。

黒須：基盤の屋台が傾いちゃったら大変ですから。ところで、学生さんが学位を取った後の就職のお話をちょっとしていただきましたけども、先生方はかなり学生さんの就職にも気を配って指導されていらっしゃいます？ 例えば就職先の紹介をされるとか。

鈴木：それはできないですよ。歴史が浅いし。

黒須：もう自分で探してきなさいと。

鈴木：上手く求人条件にあてはまる人がいるとは限らない。売り込みみたいなことは、しない。だからさっきから言っているように、本になるような立派なディサティションを出すこと。それしか対抗策はない。

稲賀：「植民地」がないとなると、やはりとにかく博士号を持っていることが、最低限の形式要件となる。公平な公募をやっている就職先だったら、最終選考に残るか否かは、現時点ではまだ、博士号の有無が分かれ目にはなりません。あとは選ぶ方の腹積もりですから、専攻側からそれ以上のことはプッシュできない。

鈴木：もう昔みたいに強引な偉い先生が自分の弟子を押し込むみたいなことはほとんどないもの。たまにはあるんでしょうけども。

黒須：逆に言えば植民地はもうほとんど開拓され尽くしちゃっていると。そういう意味では、学生さんは大変だけど頑張ってください、ということになりますね。

最後に、ちょっと。今回のインタビューの記録は、それぞれ章立てをしてウェブサイト掲載しようと思っっているんです。例えば日本歴史研究専攻では文献史学とか国文学とか、何学というかたちでタイトルを一応つけさせていただいているんですけど、さて日文研さんはどうしようかと悩んでいるんです。

稲賀：やっぱり国際日本研究でしょう。

黒須：何とか学ということでは学をつけるとおかしいですか。

稲賀：やっぱりジャパニーズ・スタディーズでしょうか。海外の場合でも、器としてはジャパニーズ・スタディーズという以上、その中にたくさんの「学」が入っているでしょうけど、全体を統一したものを「学」と呼ぶべきかどうか。かつては「日本学」ドイツ語なら Japanologie と称していたわけですが、それはもう時代遅れ。

黒須：一つの学というディシプリンではなくて、日本研究にいろいろな学が集まってきて。

稲賀：外国では、今でも場合によって「日本学」という言い方をしていますが、そんな枠組みは日本には存在しないわけです。そんな何でもありみたいなものが「学」になるわけではない、というのが日本の学界のスタンスですから、最初から認識がずれています。

黒須：こちらで出している雑誌も「日本研究」ですから、日本研究とさせていただくのが

一番よろしいですかね。

鈴木：ジャパニーズ・スタディーズ。

稲賀：北京は日本学研究所、「日本学研究中心」だな。

黒須：日本学でもよろしいですか。

鈴木：いや、日本学はジャパノロジーの訳。ジャパニーズ・スタディーズは日本研究です。

黒須：やはり日本研究。

稲賀：うちは日本語では「日本研究」という言い方になっていますよね。たぶん「ジャパニーズ・スタディーズ」の訳なのだろうけど。

黒須：ジャパノロジーとジャパニーズ・スタディーというのはやっぱり違うものですか。

鈴木：公式的な見解は、エリアスタディーズの古いかたちがジャパノロジーでした。各分野の日本文化研究がジャパニーズ・スタディーズです。ところが、それをインター・ディシプリナリーでやるのが、うちの方針ですから。これを何とえばよいか。

黒須：それぞれ独自の研究の集合体という感じが日文研のジャパニーズ・スタディーズ。

鈴木：それに対して、もうひとつ、例えば社会学という一種普遍的なディシプリンがあるわけです。その中で日本のケースを扱う人たちもあちこちにいる。ジャパニーズ・スタディーズとは各国の中でぶつかることもある。

稲賀：だから社会科学系はそうですね。社会学はどっちつかずの領域ですが、これはもうひとつ大づかみに言っちゃうと、つまり日本で今、社会学の講座にどういう先生を採っているかという、国際的な経験のある候補者であれば、その多くは北アメリカで社会学を専攻したP h D取得者たち。ところが彼ら彼女らの多くは、実証的なフィールドとして何をやっているかといえば、一番有利なのが、たとえばハワイの2世・3世の聞き取りの研究などとなるわけです。たしかに貴重な研究ですが、世渡りとしては、見事に二枚看板となる。つまり北アメリカでは日本人であることの利点を生かせる調査でディプロームをもらっているのに、帰ってきたらいかにも北米仕込みの最新の社会学理論みたいなことを教えている。この裏表を生かして、それで就職戦線に勝利する。だから北米へ行ったら日本学

者なのに日本では社会学者ですという好都合な状況が生まれる。別に非難しているわけではなくて、それはそれで見事な選球眼です。昼間は銀行家だったアルフレート・シュッツが、だからこそ夜は学者稼業に精をだして、北米亡命者として、生活世界の重層的構造を見事に描けたのと同様で、こうした二枚看板こそ、いかにも社会学的な世渡りなのですから。

鈴木：私たちはどっちとも付き合しましょう。うちはもう八方美人。全方位外交が方針です。

稲賀：たとえば、社会科学系の研究者の方で、あまり日本語は達者ではないのだけれど、という方でも、受け入れ条件があれば共同研究員、国外の客員研究員としてお越しいたごいます。そういう方のほうが、海外に「日本研究」を発信するときには、かえって有利という場合もあるからです。日本を扱うにしても、ある程度の学術レベルの人だったら、日本語には不自由でも、英語でそれなりの論文を書ける、というケースもあって、この間もそうした外国人客員教授のオランダ人の方が研究代表者となって、日本社会の現状批判に関する論文集を、ロートリッジから英語で1冊、本にして出すことができた。だからその辺の受け入れ条件は、あまりリゴリズムになって自分の首を絞めたってしょうがない。さらに言えば、今、日文研は猪木武徳先生が所長ですから、ある意味でこれは最初に言及したのと同じ問題を体現しておられるわけです。猪木先生のご専門は経済学ですが、さらに踏み込めば、ご専攻は日本経済論とりわけ労働問題。そこでは経済学という普遍性・一般性ある学術分野と、日本研究という地域研究とが、2重にタブっている。それをうまく重層的に使っていくという利点を、猪木先生はご業績でも発揮しておられます。しかしだからといって、少なくとも今のところは、日文研はあくまで社会科学系の研究所ではないわけです。

黒須：総体的には人文系？

稲賀：一応「文化」がついていますから、常識的には「人文系」でしょうけれども、しかし経済も、政治も「文化」の一部をなす、とはいえるでしょう。

黒須：そういう言い方もあるし、カルチャー、自然科学も。

稲賀：自然科学だって実は方法論でやっぱり「文化」を背負っていて、それこそ総研大でノーベル賞を取った小林先生が、道教の方法論的可能性に言及されるようなことにもなるわけですから。

黒須：そういう意味ではいろいろ難しい点もあるかと思います。

今日は長時間にわたっていろいろな話をお伺いしたんですが、総研大で学位を取ろうとしている学生さんに両先生から一言ずつお言葉を、学生に送る言葉というか。

鈴木：私は、もうあと4年で辞めますので、それはありません。

稲賀：もう取らないんですか。

鈴木：私がもう取らないというと怒る人もいるんだけど。

稲賀：鈴木さん、それでおしまい？ 取らない人は、遺言はしない？

鈴木：おれは責任持てないよと。

黒須：学生は取らなくても言葉は残していただくということで。

鈴木：学科長と専攻長には言葉を残しましょうか。とにかく中国で講演旅行をしてきて、ショックを受けています。中国の大学院生たちは、目を輝かせて聞いてくれるから。本当だよ。上海でも北京でも広州でも、わたしは中国に行こうかなと思うくらい（笑）。今、そういう時期なんでしょうけども。

黒須：アカデミックにハングリーであると。

鈴木：ハングリーって、何で？。

黒須：じゃないんですか。

鈴木：金もうけしたい子は経済学部に行っている。そういうところに行かずに、日本文化なんか勉強したいという子たちが、本当にみんな賢い。

黒須：そういう意味では、特に日本人の学生に覇気を持つてという。

鈴木：そんなことを言ったって駄目ですよ。言っただけならとっくにやっているんじゃないの。私は社会の病理の問題だと思っているけど。ちゃんとステップを踏めば大学の先生になれる。その努力さえすれば就職できて、ある程度安定して、あくせくしないでやっていけるということが目に見えてあるところとないところのちがいでしょかね。

黒須：わかりました。じゃあ、稲賀先生。

稲賀：日本でも、中学生にアンケートを取れば、大学の先生という職業は、わりとなりたいたいという希望のランキングの、2位ぐらいには入っているわけでしょう。

鈴木：そうなの。知らなかった。

稲賀：けれどそれは、言ってみればわりとプー太郎みたいに近いことでフレックスタイムが使えて、しかも収入はつましい低水準だけれど一応安定しているという雰囲気が何となく伝わっている程度のところで、つまり逆に言うとそれ以上の是が非でもという目標とはどうも言えないのではないのか。現実突き当たると、やっぱり夢想していた「研究者」の人生とは違って、幻滅した、という話になっちゃうのではないのでしょうか。

それからもう一つのことを言えば、やはり大学教授の社会的地位というものが韓国・中国の場合と日本とでは、かなり違う。実際には中国だって給料はすごく低いわけですけど、日本の場合には、大学教授という職種は社会的にあまりにひどいインフレーションを起こしてしまっていて、もはや希少価値はなく、あまり才能はないんだけど何か飯だけは食っている変な人たちという、ほとんどそういうイメージになりかかっているような気がします。

鈴木：中国はそんなに低くはないでしょう。給料のベースは低いけど手当でだってあるし、いろいろな副業はいっぱいあるし。

稲賀：あとは才覚で副業は取れるからね。いまさらメッセージでもないですけど二言だけ言うと、これは去年の文化学科の学生セミナーのときにも触れましたが、いわゆる日本専科の外国人の先生たちと付き合っ、それで国際化が実現できたと思うのは大間違いなのですが、しかしそうした幻想がわりと広く蔓延っているわけです。つまり日本学の専門家ではない学者や一般人にも通用する海外発信をどうしていくのかということが視野から落ちてしまうと、国際日本研究は看板倒れとなって危ない、という気はします。それが一つ。

それから二つ目は、実は小松先生が国際日本研究専攻の『概要』に書いてくださった文章を私もそのまま引き継がせていただきましたけど、そこにもあるように、夢としてはやっぱり梁山泊だか五百羅漢だか知らないけれども、そういう独り立ちができるような研究者のネットワークを、多国籍な文脈で脱領域的に作っていくことが、日本全体で実現するのは無理でしょうけれど、ある特異点においては、世界的というか国際的な責務だと思うのです。しかし今、そうした国際的な責任への意識が、日本のトップの大学でも非常に薄れてしまっている。これはさきほども鈴木さんが言ったように、人文系で大学院に残る学生さんというと、いまや日本で教育を受けてきた多くの男の受験生たちには、どうにも覇

気がなくて、聡明な女の子たちが中心となるのですが、日本国籍の人に限れば、そこには例えば旦那に食わせてもらっているから学問を続けるだけのゆとりがあるというような、恵まれたタイプの才媛がますます増えてきていて、これはある意味で、世の中のどん詰まりを反映した様相なのです。それに危機感を抱かずにいると、それこそ日本社会は危ないでしょうという気はいたしますけれど、そこから先は、今は割愛します。その代わりに、『概要』の小松和彦先生の一文は、院生の奮起を促すためにも、すごくいい文章なので、小松先生から許可をいただいて、これを院生へのメッセージとして引用させていただくことにしたいと思います（総合研究大学院大学文化科学研究科『国際日本研究専攻概要』2007年版以降の「国際日本研究専攻について」を参照）。

黒須：僕はまだ読んでいないので。

稲賀：もちろん日本語で頂戴したのですが、あまりに良い文章だから書き換えるのはもったいなくて、小松先生からお許しを得て、そのまま受け継いで、使わせてもらっています。

それから、最後にもうひとつ付け加えるならば、この『概要』に卒業生からも文章をいただいている、例えばさきに触れた「ちゃんばら」研究の小川順子さんの文章は、残念ながら最新版からはもう消えてしまったのですが、とてもよいメッセージでした。つまり、「専門家にしかわからない言葉は使うな」ということを、論文執筆の途上で先生方から何度も諭された。その教訓がそれ以降の人生や教育の場で大変に役に立っている、ということです。逆に言うと、自分の専門の内輪の言葉遣いでは通用しないような人びとと交わるときに、どうやって自分のメッセージを伝えるかという訓練を受けていたのだ、ということが、教壇に立つようになって、初めてわかってきた。それは、国際日本専攻には多くの国々から様々なディシプリンの学生が来ていることの、ひとつのメリットかもしれません。

黒須：そうですね。特にそういう点では日文研ならではの気付きがあっただけではないはずですね。

鈴木：そういうところで、別の訓練がなされるんですね。同じ業界では前提にしてしまっただけで、あいまいになっていることを問いなおす。はっきりさせましょうということです。教員も問われるのです。

黒須：それは大事な非常にいいことですよね。

稲賀：実際、日本文学に限ってみても、やっぱり中国から来た方と北米から来た方、さらにロシアや東欧で訓練を経てきた先生方が、同じテーブルで議論するのは難しい。英米の先生方は、論文は母語で書くのが主流。これに対して中国・韓国の日本専門家は、英語などは不得意な場合が多い。そのため、まず作業言語のうえでなお問題が残っているし、方

法論や問題意識の面でも、そう簡単に学術的な交流は成立しないんです。だけど今、とかくお仕着せの公開シンポジウムという、高名な日本語遣いを選んでパネルを開き、そうした学術会話が成立したかの幻想を与えるようなものばかりが奨励されている。しかし水面下では交流はうまくいっていない。舞台裏には問題山積というわけで、そのうまくゆかないところから目を逸らさない批判精神が、やっぱり大切だろうと思うんです。

黒須：イニシアティブのフォーラムにしてもその形と実というものが必ずしも同期していないことがよくありますよね。

稲賀：とはいえ、この間のフォーラムには准教授の方なども熱心に参加していて、あとで伺うと、あれはすごく面白かったと言っていました。実際に参加すれば、いろいろなことを学べる。もちろんだからといって、こうすればいいという万能の処方箋はすぐには出てこないけれど、自分のやっていることをもう1度問い直すには、とても良い機会にはなる。とすると、今一番困る、というか問題なのは、肝心かなめの院生の人たちにそこまでの余裕があるか、ということなんです。景気が悪くなっちゃうと、もうとにかく自分のことで精一杯、自分の属する狭い専門ディシプリンのなかで早く博士論文を出さなくちゃ、と焦ってしまって、周囲のことなど無関係、といった視野狭窄になってしまう。せっかく多様な刺激を受ける恵まれた機会が、国際日本研究専攻、さらには文化科学研究科には用意されているのに、それを生かして食欲に吸収をしてゆく、というだけの知的・心理的な余裕が、院生の方にちょっと今、なくなっているんじゃないのか、という危惧は抱いています。

鈴木：今、博士論文の書きに入っている連中が多いからということもあるんじゃないの？

稲賀：そのとおりで、3年生以上になるともう周囲から「早く」とせっつかれてしまうし、そのため、学生セミナーなどの催しにもなかなか参加もできないし、そんな暇があるくらいなら、自分の論文に集中するのに必死です、という反応が返ってくる。2年生後半でも、もうきついですよね。制度的には3年を博士課程の就学年限にせざるを得ない。けれど、どうしても博士論文完成にはもっと時間がかかってしまう。ところが、さっきも李偉さんからご証言頂いたとおりで、1年生のときにはまだ何も見えていない、という否定しがたい現実もある。そこで我々教員側は、いったいどういう具合にインセンティブを取るべきなのか。これはなかなか難しい、模範回答なき世界ですが、それが教育というものでしょう。

黒須：今日は貴重なお話をありがとうございました。もう鈴木先生は突然で。

鈴木：いいえ、とんでもありません。稲賀さんからそれとなくずっと言われていたので。

黒須：そうですか。どうもありがとうございました。李さん、どうもありがとうございました。

稲賀：どうも、長大なお時間を取ってしまってすみません。ありがとうございました。

黒須：稲賀先生、本当に今日はありがとうございました。

稲賀：このコモンルームという空間は、そもそもこうした懇談をするためにあるわけで、今日はなぜか暖房が効かなくて申し訳なかったのですが、通りがかる同僚や院生をインターセプトして、いろいろと情報を交換する学術創造の仕掛けとして創った場所なのです。ところが法人化以来、最近ではこうした自然発生的な論壇風発を望んでも、それこそ我々のほうに精神的・時間的余裕がさっぱりなくなってしまうました。その意味でも、今日は、遠くからわざわざお越しいただいた黒須先生に、むしろこちらから感謝申し上げなくてはいけないと思います。

黒須：ありがとうございました。